
エースをねらえ？

蒼井 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エースをねえ？

【Nコード】

N6025C

【作者名】

蒼井 涼

【あらすじ】

勉強はできるけど、足が遅くてスポーツ苦手な少年の物語。スポ根じゃないけど、今時のさめた少年達にも熱い心があります。

第1回

第一回

「受験の神様」なんていない。

特に中学受験なんて、向き、不向きでほとんど決まる。

俺は塾に行かなかった。家庭教師もいなかった。

親は熱心だったけど、普通のリーマン家庭としては

高いお金払うのは嫌だったんだろうな。

なんと虫のいい話だろうと、今は思う。

でも、かなり熱心に勉強はみてくれた。

高校や大学受験じゃないんだから、何とかなった。とは思う。

とはいうものの、今大学生の俺は、結局塾や予備校には

行かなかった。でも第1志望に現役合格だ。

向き、不向きがあるんだ。自慢しているつもりはない。

何にでもある。

俺は、足が遅い。

だからサッカーやったら、後ろの方でデフェンスしか

やらせてもらえない。

しょうがないよね。不向きなんだ。

「頭がいい」なんてのは幻想だ。

合格したんだから、みんなそれなりに「頭」はいいはずだろう。

でも、やっぱり向き、不向きがあるんだ。

順番がついてしまう。

がんばっても、やり方間違えば結果は出ない。

でもやり方教えてもらっても、結局向き不向きがある。

親は子供を、子供は自分を知らなければならぬんだ。多分、少しでも早く。

とにかく、俺は全国でも有数の私立男子校に入学した。それなりに誇らしかったし、うれしかった。

なにせ子供だから、男だけで6年間でことも深く考えなかった。

入学してすぐに友達はできた。

授業やはじめての定期試験も、別にどうということもなかった。宿題はけっこう多かったけど、それもなんとかこなせた。

相変わらず、足はおそかったけど。

そんなこんなで、1学期が終わるころ、クラブ活動に参加する時期が来た。

男子だけだからか、とりあえず全員が運動部に入る決まりだった。

実は、内心、野球部はどうかと思っていた。

足は遅かったけど、投げたり打ったりは得意だと思っていた。

(特に根拠はなかったが)

しかし、野球部希望の連中を見て、すぐにやめた。

スポーツやらせたら、何でもOKというやつらばかりだ。

これはいけない。

そんな時、一番気の合う坂本が言った。

「テニスやらないか？」

「てにす？」

「いや、テニス」

何で、テニス。と思ったが、すぐに気が付いた。

テニスなんて、小学生の頃からやってるやつなんて、そうはいない。

ましてや、受験勉強ばかりやってきたやつばかりだ。

テニスならみんな同じスタートラインだろう。

足がおそいのも関係ないだろう。（これは大変な間違いだった・

・

即断した。

「やろう」

こうして、俺の本当の十代の物語が始まった。

第2回

学校は小高い丘の上にある。

電車を降りてから、ゆるやかな坂道を
15分くらい歩く。

中学部、高等部の生徒がまじりながら
ぞろぞろと歩いている。

男子校なので、はなやかさは全くない。

甲高い笑い声や、会話もない。
静かなものだ。

夏を迎えて、早く登校するようになっていた。
少しは涼しいからだ。

すると、毎日同じ電車になる上級生に気が付いた。
同じ制服だが、あきらかに高等部だ。

テニスバッグを担いでいる。

俺は中1としては背が高い方だ。170cmはある。
身長は負けていないが、厚みが違う。

なんか、かしこそうにも見える。

それよりなにより、いつも決まった女子高生という。

俺は俗に言う「晩生^{おくて}」で、女の子にはほぼ無関心だった。
それでも、可愛い子だと思った。

ただ、彼氏と彼女という風には見えなかった。
時々、小声で話してはしていたが笑顔がない。
特に当の上級生の態度はよろしくない。

自分からはほとんど話しかけない。話す時も

めんどくさそうだ。

俺たちは先に降りるのだが、彼女？に会釈もしない。さすがに、いかななものかとは思っていた。が、俺には関係ない。

ただ、何となく気になっていた。

そのうち、その上級生の名前が市村だと知った。テニス部の説明会に、キャプテンとして来ていたのだ。その上、実は県大会でも上位に入る実力者と知った。

そんな人もいるのか。

なめていた俺は少し驚いた。

「お前、市村さん知らないのか？」

坂本があきれたように言った。

「いや、前から知ってるよ。」うそじゃない。

「じゃ何でビックリしてんだよ。この前、朝礼で紹介されてたろうが。」

市の大会優勝。」

俺は何をしていたんだ？立ったまま寝ていたのか？

「おお、そうだったよな。遠くてよく見えなかったのかも」

そういうと、坂本はフンと鼻を鳴らして

「俺が背が低くて、列の先頭なんでよく見えた、と言いたいのか」
気にしてるんだ。

「まあそうだ。」

「けっ。卒業する頃には見下ろしてやるからな」

無理だろう。お前の両親、今の俺より背が低かったぞ。

しかし、部活始まったら、間違いなく見下される。

運動に関しては、すべてにおいて坂本に勝てない。

でも、いいやつだ。正直でわかりやすい男だ。

それに、俺よりも女子への関心が高らかに高い。

一度、聞いたことがある。

「何で、男子校に来た？ 国立の付属に行けば良かったのに」

「言っな。抽選で落ちた。」

「そうか。」

「でもな、うちの学校、同じ系列の女子校があるだろう。

交流があるらしいぞ。テニス部もあるはずだ。」

「そうか。野球やサッカーだと交流はないよな。」

「それが動機か？」

「もちろん、それもある。でも、親がテニスやってるんだ。

俺も少しやらされた。けっこう面白かったよ。」

なるほどなあ。正直な男だ。

「そついうお前は何で？」

「お前が誘ってくれたから」

そう答えると、坂本はうれしそうな顔してくれた。いいやつだ。

第3回

テニスには、硬式と軟式がある。

中学の部活動として多いのは軟式だ。

コートは土でいい。ボールも安いし、安全だ。

しかし、世界でテニスと言えば硬式だ。

よく聞くウィンブルドン、ローランギャロスなど全部硬式だ。

俺の学校も中学から硬式だ。

それがいいのか悪いのかはよくわからない。

結局、入部希望者は30人もいた。

コートは2面しかない。

多すぎると抽選になるかもしれない。

全員は入れたとしても、まともにコートで練習できるんだろうか？
などと心配していたが、杞憂だった。

俺のような不安になった連中がかなりよそのクラブに希望を変え、
20名になった。

もちろん、坂本と俺は勇んで入部した。

なにせ、練習は週3日。後は自主練習で、これは朝だけ。

練習は夏休みから始まった。

とりあえずラケットは親父が遊びでやってた頃のお古。

シューズはスポーツ量販店の特価品。

別に不満はなかった。どうせ、レギュラーなんかなれっこないし。
と、ネガティブな気持ちでスタートした。

坂本はラケットも新品。気合入りまくりだった。

ラケットの握り方から入ったが、案外すぐに打たせてくれた。
やってみると面白い。隣のコートで上級生が練習している。

うまい。先生は、いろいろ注意、指摘してくれるのだが、それよりも上級生を真似て打っていた。

一週間ほどたったある日、先生が1年を全員集めて言った。

「一週間見てきたが、レベルに少し差がある。」

今日から2つのグループに分かれて練習する。」

来たよ。また選別だ。でも仕方ない。

いっしょくたにやるには人数多すぎるし効率も悪い。

公式戦の団体戦メンバーは7名。補欠が2名。

最終的にはそこまで選別される。

下級生に抜かされることもある。狭き門だ。

坂本はレギュラーを目指す組に入れるだろう。俺は・・・

「西山、お前こつちだ。Aだ。」

言い忘れたが、俺の名前は西山健斗。

ケントって読む。親父がスーパーマンが好きで、俳優のクラーク・ケントからとったらしい。ありえない。

それはともかく、意外にも俺はうまい方の組に入った。

先に呼ばれたAの連中も意外そうに俺をみていた。うれしそうな顔をしてくれたのは坂本だけだった。

その日から、急に厳しくなった。

Aチームは10名。微妙な人数だ。

間違いなく、俺が一番下手だ。

でも、スポーツで、なんらかの形で選抜されたのは人生初だった。ドンジリでもなんでも、すぐうれしかったので

はりきってがんばった。

朝の練習も、欠かさずやった。時々先生も見に来るし、アピールしないよね。（せこい・・・）

そんなある朝、先生が俺を呼んだ。

「西山、ちよつと来い。」

やばい、Bに行けと言われるのかも。とおのきながら先生の所に行った。

「はい・・・？」

「おう、毎日がんばってるな。」

お前な、足が遅いよなあ。」

来たよ・・・。

「でもな、お前、人のフォーム真似るのがうまいな。」
ん？

「それも才能だ。お前、サーブは誰かの真似してるか？」
どうやら、B行きチケットの話ではなさそうだ。

「ええ、市村さんの真似してみました」

「市村か。やつぱりな。でもな、お前には向いてない。」

市村よりな、原口の真似してみろ。背の高さを生かすにはその方がいい。それに原口はな、お前みたいに足が遅いんだ。だから、早いリターンを打ち込まれると追いつけない。

それを防ぐために、まずサーブを磨いたんだ。それに、

広いコートで一人でカバーするシングルスよりも

ダブルスのレギュラーを目指した。それが、大正解だった。

今、原口と吉村のペアは県大会でも上位に食い込む。

お前もそれを目指したらどうかな。」

信じられない。つまり、俺をダブルスのスペシャリストに育てようとしてくれるんだ！（誰もそこまで言っていないし・・・）

俺はあきらめもいいが、何でも都合良く受け止める性格でもある。その瞬間から、俺はダブルスのレギュラーを目指すべく努力を始めた。

第4回

7月も半ばをすぎ、ハードコートの照り返しはいよいよ強くなっていった。

進学校などというと、夏休みも宿題がたくさん出され、部活動なんてろくにやらない。と、思う人がほとんどだろう。

ところが、高校受験がなく、6年間同じ学校で過ごすというのはある意味ゆとりがある。

大学受験なんて、中学1年の俺たちにははるか彼方のように思えた。みんな高校2年の秋の大会まではしっかり続ける。

週に3日しか練習できないけれど、その時間の集中力はなかなかのものだ。

俺の所属するAチームは、夏休みも半日だがほぼ毎日練習がある。

両親は意外だったようだが、運動の苦手な息子が

はじめて認められて楽しくやっている様子にうれしそうだった。

まあ、1学期の成績もそこそこ良かったからだが。

成績と言えば、坂本もすごい。数学はいつも満点近くとる。

数学だけはかなわない。数学が大好きだという。

まあ、これも向き不向き。

ところで、中学、高校の団体戦というのはシングルス3名、ダブルス2組で

1チームを組む。つまり、3勝すれば勝ち。

シングルスは、サーブ、ストローク、レシーブ、ボレーのすべてが平均以上でなければならぬ。その上で、エースがとれる武器がいる。

さらに、当然のことながら、広いコートを素早く動ける足もいる。

つまり、チーム内の上位3人が務めることになる。

中学1年でも秋には新人戦がある。小さな大会だが、デビュー戦だ。8月の合宿でレギュラー7名を決めるらしい。

俺はともシングルスでは太刀打ちできない。はじめからダブルスを狙っていた。

問題は、誰と組むかなんだ。というよりも、誰が組んでくれるかだ。そのためには、俺も何か武器が必要なんだ。ダブルスでこそ活きる武器が。

先生に言われて、まず原口さんを観察した。原口さんは高2でダブルス1。

つまり、1つ勝ちが計算できるペアだ。相方は吉村さん。小柄だが、とても機敏に動く。

原口さんがドーンとサーブを打ち込み、かえってくるへろへろ球を吉村さんが

スパツとボレーで決める。美しい。

吉村さんのサーブは原口さんのようなスピードはない。

しかし、かなりの回転のかかった球で相手も強くは打ち込めないことが多い。

何回かラリーになることが多いが、吉村さんが左右に素早く動き返しまくる。

そのうち、浮いた球が返ってくる。それを背の高い原口さんがなんとなくボレー、スマッシュで決める。

すごい。

極端な言い方をすれば、シングルスは本当の力勝負。

でも、ダブルスは各人がオールマイティである必要はない。

お互いの長所を活かせる組み合わせであれば戦える。

しかし・・・とりあえずチーム内での順位戦なるものがある。

先生は言った。

「順位戦上位7名で団体戦に出る」

やばい。シングルスでは、誰に勝てるか？

2名には勝たなければならない。

長谷川、こいつには絶対に勝てない。中2のレギュラークラスとい
い勝負する。

高木、うーんこいつもうまい。体は大きくないが、ミスしない。

内山、足が速い。小柄だが、バネがある。拾いまくる。

佐々木、気が弱いのがたまに傷で、うまいのにミス連発することが
ある。うーん、微妙。

坂本、強い球打ちやがる。ベースラインで打ち合ったら勝てない。

武田、一回勝ったことがある。でも一回だけ。50回位負けてる。

川村、こいつとは五分五分かな。可能性はある。でも川村も思っ
てるだろうな。

上村、物静かな男だが、持久力抜群。多分一番だろう。サーブが弱
いのが狙い目だが。

鈴木、いい球打つんだけどミスが多い。チャンスボールほど力んで
しまう。

まあ、確立からすると川村と鈴木と上村、それに俺の4人から2人
が補欠に回る可能性が高い。

いや！それでは、物語にならんだろう！

面白くないだろう！

面白くしてみせる！と、根拠のない雄たけびを心の中でつぶやいた
俺でした。

第5回

ところで顧問の先生は3人いる。

中学部Aの橘先生、Bの石本先生。

そして、高等部の熊田先生だ。

高等部Bには顧問がいない。

同好会みたいなもんだからだ。

中学Bでも3年間やれば、そこそこ打てるようになる。

試合に出ても、まあかつこ悪くない。

テニスは、その気になればずつと続けられる。

一生の趣味にだってできる。大人になってから始めることを

思えば基礎が身に付くから楽だ。

そんなわけで、楽しい雰囲気だ。Bは。

Aが面白くないというわけではない。

ただ、先生の目指すところはかなり高い。

正直、俺たちのような学校が毎日練習している学校に

そんなに勝てるわけないと思っていた。

ところが、案外そうでもない。

まず、硬式をやっている学校が少ない。

つまり、競争相手が少ないのだ。それに、

団体戦で必要な7名のレベルがなかなかそろわない。

たいてい飛びぬけてうまいやつが一人二人はいるが、後はたいしたことない。

特にダブルスに力入れてる学校は少ない。

うまいやつは、学校外でテニススクールなどに通っている。

だから学校ではあまり練習しないわけだ。

実際、毎年団体戦では市の大会で優勝したりもしている。

そんな話を聞かされ、なんとなくその気になっていた。

女子もないし、気が散ることもない。

きついけれども、充実していた。

そんな或る日、合宿があと10日に迫った日の朝。

午前中の練習日だったので、俺は朝早い電車に乗っていた。

「古川〜古川〜」降りる駅だ。

と。そのとき、「西山」と声をかけられた。

振り向くと、原口さんだった。

「おはようございます。今日は午後からなんじゃ」

「おお、そうなんだけど熊先に言われてさ。」

熊先とは、熊田先生のことだ。

「はあ。」

「ばか。お前にダブルス教えてやれとさ。

めずらしいぞ。早くからダブルス専門目指すなんてな」

「そうなんですか。でも、俺多分一番下手ですよ。足おそいし。」

「俺もそうだった。まあ、足は遅かったけど、一番下手ってことはなかったけどな。」

高等部の熊先が俺を見てくれたのか？それともタッチ、失礼、橘先生が？

まあいい。とりあえず、俺はうずもれてはいないわけだ。

原口さんはこわもてだ。無愛想だし。でかいし、目つきこわいよ。

普通にしても、相手はビビルだろう。

でも、話すと普通の先輩だ。

コートにつくと、まだ誰も来ていなかった。

「西山、サーブ打ってみるよ。」

「はい！」超ラッキーだ。

今日まで、原口さんを目指して、いや、真似してがんばってきた。今こそ成果をみせるんだ。

張り切ってベースラインに立った。

一球、二球、三球、・・・

「西山、なかなかいい球打つな。」

「そ、そうですか」

「ああ、俺のフォーム真似してくれたのは光栄だよ。

でもな、やっぱりまるつきり俺と同じじゃまずいよ。」

「す、すみません」

「いやいや、真似したことが悪いわけじゃない。お前は俺より、手首がやわらかいみたいだ。

だから、それを活かしたほうがいい。」

「手首？ですか」

「ああ。最後にスナップ効かせるんだ。もつと速い球打てるぞ。」

指摘してくれたのありがたいが、いったいどうすればいいのかわからないよ。

手本を見せてくれたらなあ。真似には自信あるんだ。

すると、原口さんがボールを拾い上げ、俺に投げてよこした。

「投げ返せ、西山。」

「？」

「いいから。」

いわれるままに、軽く投げ返した。

「コートの端に行け。」

いわれるままに、走った。

でも、これじゃキャッチボールだ。

キャッチボール！そうか！

「お前、速い球なげるようになったな」

小学生の頃、親父がうれしそうに言っていた。

「最後に手首を開放するんだ。軽くなげてもピュッと行くぞ。」
これだ。思い出した。投げた。

「西山、それぞれ。感じわかるよな！」

ラケットとボールが当たるのは一瞬だ。その瞬間手首が硬いままでは
いまいちボールにいきおいが出ない。力が伝わりきらないんだ。
ありがとう、原口さん！

というわけで、俺のサーブは武器になった。

ようやく、少し自信がもてた気がした。これを磨くんだ。
サーブから試合を組み立てるんだ。

その日から、すきをみてはひたすらサーブを打ち込んだ。

第6回

今日も暑い。

でも、学校での練習は休みだ。

先生が出張なのだ。

というわけで、家にいる。宿題もやっておかなければ。

そう思っていたら、坂本から電話がかかって来た。

「練習しないか？」

「どこで」

「竜王山公園のコートがとれたんだ。」

「竜王山？どこよ、それ。」

「地図で見ろ。学校に近いよ。」

「ふーん。誰がくんの？」

「俺の小学校以来の友達でさ、古川中行ったやつ。

スクール行つててさ、めっちゃうまいぜ。」

「そんなやつ、相手してくれんのか？」

「ああ、教えてくれるってさ。」

ふん。まあいいか。俺より下手なやつと練習したってしょうがない。

（俺より下手なやつ探すほうが難しいけど・・・）

案外親は何も言わず、竜王山公園まで車で送ってくれた。

フラフラと町に遊びに出るよりはましと思ったんだろう。

約束の3時にはまだ30分もあつた。

一人では何もできないし、公園管理事務所の休憩室で待つことにした。

自動販売機もあるし。涼しいし。

誰もいなかった。

この暑いのにテニスする人間はいないってか。とれたわけだ。ソファもひとりじめだ。

とりあえず、くつろいでいたが、ふと聞いたことのある声が聞こえた。

「あゆ、ほんとにやるの？ ちょーあついよ。平田君、ほんとに来るの？」

「坂本君はそう行ってたけど」

坂本？ んん？

声の方を見た。すると、知らない顔と何度か見た顔があった。

市村さんと電車に乗ってた女子だ。状況からすると、「あゆ」という呼び名らしい。

それより、坂本って俺が待っている坂本か？

いかにも安直な設定だと思われるかも知れないが、こういう事はある。

それより、中学生だったのか。市村さんといたから高校生だと思っていた。

関係はわからないが。もし中1なら、市村さんの彼女ってわけでもなさそうだけどな。

そうなんだろう？ もし違うなら・・・

ただ、そこから話が飛躍するかはどうかは別なのだ。

だいいち、向こうは俺をまったく知らないし、知ったところでどうにかなるもんでもない。

そもそも、さきほどの会話から察するところ、平田とかいうやつがお目当てなんだろう。

たぶん、坂本の友達でめっちゃうまいやつなんだろう。

そんなことを考えていたのだが、どうも妙な気分だった。

「西山、ほんとに来たな。」

誘っておきながら、何を言うか。

「ああ、ひまだからな。早くやろつや。」

「おお。平田は来てるか？」

「誰よ、それ」

「言っただろつが。めっちゃうまいやつ。」

俺が知るわけないだろうが。

「あつ、来た来た。平田！」

あいつか。小柄だけどな。

「ああ、坂本。さんきゅう、来てくれて。

あ、東光の友達？」

俺の方を向いて言った。俺の学校は東光学院という。

「俺、西山。下手だけど、よろしく。めっちゃうまいらしいね」

「小学校の3年からやってるからね。でも、坂本なんか

中学から始めて、けっこう手強くなってる。そんなに変わんない

よ。」

なんだ、いいやつじゃないか。ここは、素直に教えを請うことにしよう。

「いや、坂本はほんとうまいんだけど、俺はまだまだなんだ。

今日は、色々教えてくれよな。」

そこへ、女子の声。

「平田くん！久しぶり」あゆの方ではない女子だ。

平田くんは、少し驚いた様子だった。

「？田中？何でいるの？お前らもここでテニスやんの？」

たなか、という名前か。坂本が、ぼそぼそ言った。

「俺が誘ったんだ」

こいつか。

「うちらも、テニス部なんよ。平田くん、知ってるよ。この前のジュニアで優勝したんでしょ。

教えてよ」

！なんたることだ。俺はどうなる。坂本め。

だいいち、この中で一番下手なのは俺だ。かつこ悪いじゃないか。
「よし、時間すぎてゐるぞ。やろうやろう」
坂本が逃げるようにコートに向かった。

第7回

まず、平田ちゃんと坂本が打つことになった。

ウォーミングアップだというのに、坂本はバンバン打つ。軽く打つという事ができないのだ。

あああ、と思つて見ていたが、気が付いた。

平田くんは、苦笑いしながら難なく、軽く返している。俺の学校じゃみんな苦労するのに。

力が違うんだ。

平田くんが本気で打つたらどうなるんだろう？

「よし、じゃあ4ゲーム先取でもやろうか」

平田くんが言った。

あつという間だった。

平田くんのサービスゲームは、すべてファーストサービスで終わり。4本打つたら、ラリーはなし。坂本は足が速いから、何とか返すのだがネットさえ越えない。

逆に坂本のサービスゲームは、平田くんのリターンエースで終わり。4 - 0。

「やっぱり、強すぎ。お前。」

「ん〜。まだまだだね。」

どこかで聞いたようなセリフだが、これは自分に言つたんだな。

平田ちゃんと坂本は飲み物を買に行った。

あとには、女子二人と俺だけになった。

「西山君も東光？」

「あゆ」ではない女子が話しかけてきた。

「ああ、うん。あんたらは？」

「桜花女子。あ、あたしは佐久本 美紀。こっちは吉川亜由美。」

「俺、西山けんと。」

「けんとお？」

ああ、いやだいやだ。何でこん名前つけたんだよ。

「スーパーマンだね。」

はじめて、「あゆ」が口をきいた。

こういう時は開き直るに限る。

「まあね。今の俺は仮の姿だ。」

くすつと「あゆ」が笑った。

「さむう。」

さくもお。

と、その時、坂本たちが戻ってきた。

「あれ、何してんの？打てよ。時間もつたいないよ。」

「そうだよ。今度は女子、やったら？」

俺はいつやるんだよ。

「平田くん、教えてよ。球出ししてよ。うちら二人打つからさ。」

ふん。そういうことか。

「え、まあいいけど。」

と、言いながら、平田くんは「あゆ」をちらちら見てる。

ふん。そういうことか。

「よし、さあやろつ。あゆ。いくよ！」

いけいけ。

そんなこんなで、目の前で臨時テニススクールが始まった。

女子二人も、けっこうやる。力で打つんじゃないくてスイングで打つって感じた。

それにしても、平田くんの球出しはうまい。
タイミングといい、強さといい。

うちの先生より絶対うまいぞ。ほんとにラケットが腕の一部という
感じだ。

「西山。平田はな、吉川のこと好きなんだぞ。」
わかってるよ。

「へえ、そうなんだ。」

「ああ。でもな、平田のこと好きなのは吉川じゃなくて佐久本なん
だ。」

わかってるって。

「へえ、うまくいかないなあ。」

「そうだ。」

「で、お前もあゆが好きなのか」

「あゆってなれなれしく呼ぶな！」

おうおう。図星かよ。

ということは、ここには、片思いのすれ違いばかりが集まってるわ
けか。

それはそれで面白いな。

「じゃ、俺はどうすればいいんだ？」

「お前？知るかよ、そんなこと。お前、好きな女子いないのか？」

「いない。だいいち、女子と知り合う機会ないし。関心ないし。関
心もたれないし。」

「はあ？ばかか。お前。俺たち男子校だぞ。それも6年間。

このまま大学生になってのいいのか？えらいことになるぞ。」
えらいことってなんだんよ。わけわからん。

と、不毛な会話をしていたら、臨時テニススクールが終わったよう
だ。

「お待たせ、西山君。坂本と打てば？」

「ああ、坂本、やろうぜ。」

「よっしゃ」

軽くラリーした後、といつても、坂本相手はつかれるけど。
4ゲーム先取をやることにした。
まずは、俺のサービスからだ。
いくぞ、手首の開放だ！

第8回

亜由美は楽しんでいなかった。

必死で勉強して桜花女子に入った。

友達もすぐできた。授業だって小学校のようにザワザワしていなし、先生だって全然違う。塾はただ受験に成功するだけの授業だった。毎日、学校に行くのが楽しい。

でも、何か足りない。何だろう。

今、目の前で球を打ち合っている東光の人だって同じじゃないのかな。でも、楽しそうに見える。

ただ、テニスが好きなんだろうか。

隣で平田君と楽しそうに話している美紀だってそう。

確かに平田君はかつこいい。性格だって悪くない。

小学校の時からモテモテだった。

私に気があるみたいなのも、何となく分かる。

でも、なんか違う。

「あゆ、あゆ？」

「え、あ、なに？」

「なに、ボーツとしてんのよ。勉強できるくせに」

「か、関係ないでしょ。別にボーツとなんかしてないよ。

あ、それよりあの今打ってる坂本君の相手の人、誰？」

「なに、気になんの？あれが？」

あれがは失礼でしょう。でもまあ、間が悪いので言っただけだけど。「西山君だろ？中学入ってから始めたらしいよ。背が高いし、いいサーブ打つし。」

運動はさっぱりとか坂本が言ってたけど、そうは見えないよなあ」「そう？なんかどんくさそう。ばたばた走ってるし。」

美紀は、ストレートすぎ。確かに左右、前後の動きは坂本君に比べると・・・

「ん。シングルスは厳しいだろうな。でも、あのサーブとボレーはうまいよ。」

ダブルスなら行けると思うよ。」

「ふーん。でもまあ、平田君とはレベル違いすぎ。」

「テニスはね。でも、頭なら西山君の方がはるか上だし。」

「東光だから？」

「それもあるけど、実は俺、西山君知ってたんだ。」

へえ、そうなんだ。思わず聞いた。

「でも、ちがう小学校だったよね。なんで？」

「うん。西山君、俺が通ってた塾の毎週日曜のテストだけ受けに来てたんだ。」

「日曜だけ？なにそれ」

「俺は週に3日通ってた。東光行きたくてさ。でも全然だめ。で、テスト受けた次の日曜に成績返ってくるんだよ。」

でさ、いつも最初のページの、それも上の方にいたのが西山君だった。

女子でいつも上の方にいたのが、吉川さんだったよね。」

？！そうか、いたいた。日曜のテストしか来ないのにいい点取る男子がいるって。

ケント！そうだ、変な名前だってうわさになったんだ。そっか。あの男子か。

「へえ。頭はいいんだ。」

「そつだよ。東光でも成績いいらしいよ。これで、テニスも負けたら俺、立場ないよ。」

平田君は、そう言って笑った。いい人だ。全然卑屈になってない。自分に自信持つてるんだろうな。

こういう男子、モデルはずだよな。なんでだろう、なのに私は引き

て見ちゃってる。

「さ、今度はあたしたちやろ」

美紀が言った。

ところが。

「悪いけど、少しだけ、先にやらせてくれる？」

と、言いながら平田君がコートに走った。

???

「なに、平田君、どうしちゃったのよ。

でも、ま、いいか。平田君のプレー見られるし。ね、あゆ

どうしたんだろ。平田君。

「坂本、ちょっと変わってくれる？」

突然、平田君が乱入してきた。

「ああ、いいけど。西山！平田と変わるから！

ボコボコにされる！」

言われなくてもわかってるさ、ばかやろう。やれやれ。

でも、平田君とやるために来たんだからな。

でも、本気ではやってくれないだろうなあ。

「ごめん、西山君。じゃ、お願いします。」

「西山でいいから。じゃ、サブ行きます。」

坂本には、そこそこ通用するけど、どんなリターンされるか楽しみだ。

さあ、いくぞ。手首の開放だ！

第9回

フォルトだ。

でも、見たことのない回転だった。

意識してやってるわけじゃないだろう。

今の球は、坂本とやってる時にはなかった。

セカンドはどうだ？

！来た。

入れてくるだけだな。

これじゃあ、軽く抜ける！

「アウト！」

なに？ねらいすぎたか？

いや、西山の足を考えてかなり内側を抜いたはずだが。

まあ、切り替えよう。

さあ、ファーストサービス、もう一度見せてくれ。

来た！

その瞬間、平田の視線から球が消えた。

次の瞬間、平田の右腕に激痛が走った。

「平田！大丈夫か！」

「あ、ああ大丈夫。」

平田にはわけがわからなかった。確かにボールのコースを

見切ったはずだった。なのに、ボディに来た。

バウンドしてからが見えなかったのだ。

確かに速いサーブだ。でも、もっと速いのを打つやつはいくらでも

いる。

そういうサーブにだって勝って来た。なのに・・・

まだ、腕がしびれている。

くそ、・・・。

どうしたんだ平田は。確かにボディに行った。(たまたま)でも、俺のサーブなんかどうってことないだろうに。

「大丈夫か。」

「ああ、いいサーブ打つね。」

「そう？平田君に言われるとうそでもうれしいよ。」

「こら、調子にのるな。」

せつかく少しいい気分なのに、坂本が水を差す。

まあ確かに、偶然とは言え、腕にあてちゃったしな。

「そうよ。平田君、これで冷やして。」

佐久本さんが、かいがいしくシツプを平田の腕に貼った。

それにしても、なんで平田は受け損なっただらう。

そんなに、変な回転がかかっていたのだろうか。

もしそうなら、意識して打てるようになれば・・・

俺は、不謹慎にもそんな事を考えていた。

結局、そのまま時間切れになってしまい、解散となった。

俺以外は、みんな同じ方向らしく、いつしよに帰って行った。

親父はなにしてた。買い物の帰りによってくれるんじゃないのかよ。

休憩所の自販機で飲み物を買って、外のベンチに座って待っていた。と、その時

「西山君」

振り向くと、「あゆ」が立っていた。

「あれ、なんでいるの？」

「うん。お父さんが迎えに来るから」

「そうなんだ。」

意外な展開に、対応できない。

「西山君、私の名前覚えてない？」

なに？知るわけないだろう？

「え、今日始めてだろう？」

「K塾の成績表」

K塾？テストの成績表か？

「K塾行つてたの？えと、吉川さんだよ．．．」

K塾の成績表は男子と女子に分かれていた。

俺は女子の成績表はほとんど見ていなかった。

「ごめん、思い出せない。」

「私は西山けんとして名前思い出したよ。テストしか受けに来ないコースなのにいつも上位にいるって、うわさになってたよ。」

へえ、そうなのか。これは喜ぶところか？

「あ、ありがとう」

「あゆ」はくすりと笑った。

笑うところか？

「ごめん、笑うところじゃないよね。でも、なんでお礼いうの？」

「いや、とりあえず、名前覚えてくれたから。なんとなく」

「ふうん。ところで今日のサーブすごかったね」

「いや、まぐれ。偶然。あれ、意識して打てたらなあ」と

「そっか。でも、そのうち打てるよ。根拠のない応援でした。」

笑ってしまった。

「笑うところ？」

しまった。ミスったか。

「ごめん。お礼をいうところか」

こんどは「あゆ」が笑った。

やれやれ。俺は女子と話すのが苦手だ。何を考えているのかわからない。

「じゃ、またね」

突然、「あゆ」は去った。お迎えが来たのだ。

「じゃ、また」

思わず、返したが「また？」

深く考えるのはよそう。ふつうの挨拶だ。また、電車で会うこともあるだろうしな。

しかし、その日から間もなく、また会うことになるとは思わなかった。

第10回

坂本は考えていた。

西山のサーブについて。

なぜ、平田ともあるう者が受け損ねたか？

それもボディに受けるなんて、ありえない。

坂本自身、西山のサーブがそれほどのもんだとは思っていなかった。

俺のときは、手加減してやがったのか？

いや、そんな器用なことできるやつじゃない。

だいいち、そんな余裕かましてられる立場じゃないよな、あいつ。

レギュラー七人枠に入れるかどうかギリギリだもんなあ。

平田に聞いても、生返事しかない。佐久本美紀もうるさいし。

だいたい、なんで吉川がいないんだよ。もつと話したかったんだけどなあ。

「坂本？」

「おお、平田、なに？」

「送ってもらってサンキュウ。おばさん、ありがとうございました。」

「あ、もう着いたんだ。じゃ、またやろうぜ。直ったら。」

「ああ、じゃまたな。佐久本さん、また。シップありがとう。」

「ううん。じゃ、メールするね。」

こいつ、平田のメアド、ゲットかよ。

平田一人が降りて、車はまた動き出した。

「お前の学校、携帯禁止じゃないのか？」

「そんなの誰も守ってないよ。学校では一応電源切ってるし。東光は？」

「もち、禁止。別にいらないし。」

「へえ」。持ってないんだ。残念ね、あゆのメアド教えてあげよう

と思ったのに」

！！

「吉川の？吉川も携帯持つてるのか？」

「わかりやすいね、あんた。」

「な、なにを言うか。別にそんなつもりじゃない。」

突然、運転席のおふくろがケタケタと笑いだした。

「みつる、（俺の名前は満）あんたね、いい加減あきらめたら？」

「え、おばさん、どういうこと？」

こら、お前ら、会話するなあ！

「この子ね、ずっとあゆちゃんが好きなのよ。幼稚園から一緒にですよ。その頃から」

「んで、告白したの？」

今度は佐久本が俺に向かつて訊いた。

「んなもの、するわけないだろうが。なんでもないんだよ。母さん、余計なこと言うなよ！」

「はいはい。バカ息子さん。」

そうだ、俺は吉川亜由美が好きなんだ。でも、あいつ真面目だからなあ、変なこと言ったら、

瞬殺じゃないかと思うと、怖くて告白なんかできるかよ・・・

いつの間にか、西山のサーブのことなど頭から消えていた坂本だった。

その頃、坂本など、まったく眼中にない亜由美は・・・

いや、坂本だけではない、男子のことなど眼中にない亜由美は、やはり母親の運転する車で家に向かっていた。

「お父さんは？」

「迎えにいくこと、すっかり忘れてビール飲んでんのよ、まったく。」

「

「ふうん、お母さん、とばっちりね。」

「ふん、お父さんたぶん寝てるし、ケーキでも食べて帰ろうか?」

「いいね、お母さん、私、ローズに行きたい」

「はいはい、お客様、ローズですね。」

ローズというのは、自家製ケーキの販売もしている喫茶店だ。

運良く、駐車場にも空きがあった。

母娘はいそいそと店に入った。

すると、そこに、西山がいた。

第11回

西山はお父さんらしき人とケーキが並んだショーケースを眺めている。

甘いもの好きなんだ。

「さ、席空いてるよ。亜由美」

母はさつさと店の奥にある席に向かった。

どうしよう、声かけようかな・・・

と、その時、西山が気が付いた。

「あれ、吉川さん」

「こんにちわ。久しぶり」

西山が笑った。自分でもなかなかうまい冗談が言えた。

「お土産？」

「ああ、いや、家で食べるだけ。」

「ケーキ好きなんだ。」

「うん。好きだな。まだガキなもんで」

「お父さん？」

「うん。親父。そうちは？」

「お母さんと来たの。待たせるとうるさいから。またね。」

「ああ」

吉川さんは、そう言って奥の方へ行った。

なんかでき過ぎた偶然だなあ。

「おい、あれ誰？」

親父か。

「今日テニスで、いつしよだった女子」

「ほお。」

なにが、「ほお」だよ。それ以上訊かないのかよ。

まあいい。別になんてことのない、偶然だからな。

しかし、その日から、何となく彼女のことが心から消えなくなった。

帰りの車の中は、相変わらずクラシックだ。

親父は中学生の頃からベートーベンやらモーツァルトやらが好きだったらしい。

わからん。眠くなるだけだ。

でも、今鳴っている曲は聴いたことがある。

「これ、テレビでやってた曲かな」

「そう。『のためカンタービレ』だ。」

「なんて曲？」

「ベートーベンの交響曲第7番、第一楽章だ。元気であるろ？」

まあ、はずむようなリズムで、明るい気分になるよな。

悪くない、と思った。

「でもな、全部通して聴くと40分位かかる。」

ありえない。40分もじっと聴いてるなんて想像できない。

やっぱり親父は少し変わってる。

さ、帰ったら宿題だ。

「だれ、さっき話してた男の子」

「今日テニスでいっしょだった男子。坂本君の友達。」

「ほお。」

「なにが、ほお、よ。」

コーヒークップを片手に母は、薄ら笑いを浮かべていた。誤解してる。

「そんなんじゃないからね！」

「何も言っていないでしょう」

「そうだけど」

「東光なの？」

「そう」

「背が高くて、まあまあじゃない。」

「お母さんも、名前知ってるよ」

「え、なんでよ。誰かの息子さん？」

「K塾に行ってたの。日曜のテストしか受けなくせにいつも上位にいる男子って、お母さんが先に名前教えてくれたんだよ」

「?・ああ、いたね。誰だっけ、ええとね、言ったらだめよ。」

「こういうのはね、自分で思い出さないとボケちゃうのよ」

無視して、ケーキを食べていた。やっぱり、ローズのミルフィーユは美味しい。

「けんと君ね！名字が思いだせない・・・ううん」

「西山君」

「あ、何で言うのよ。そうそう西山けんと君。あの子かあ、へえ。やっぱり東光入ってたんだね。」

「東光でも成績いいらしいよ。」

「だろうね。亜由美、あんた友達になったの？」

「今日はじめてテニスしたただけだから。でもまあ、また坂本君が平田君とか誘った時には会うかもね」

「ほお」

だから、何が「ほお」よ。

でも何となく、西山けんと（どんな字かわからない）が心に残っていた。

好きとかきらいとかじゃない。と思う。だって、東光行つて、まあ頭いいってことしか

知らないし。ま、いいか。帰ったら宿題だ。

第12回

「おそいな、鈴木は！携帯番号、誰か知らんのか！」
タッチが怒っている。

いよいよ合宿なのだが、鈴木が集合時間に遅れている。
参加するのは中学部の各学年のAチームだけだ。

俺は少し興奮していた。なんせ、一応選抜されてるわけだ。
東光に入ってよかった。そしてテニス部に入って良かったと、心底
思っていた。

「すいませ〜ん。」

「こら！今度遅れたら、無条件で補欠にするからな！」

「はい！」

鈴木は直立不動で怒られていた。

そこへ、なんと市村さんと原口さん、それに熊先がやって来た。
タッチが言った。

「お前らのコーチだ。」

タッチの運転で、小型バスがスタートした。

俺は市村さんの隣に座った。みんな、敬遠したからだ。

市村さんは、もの静かな人だった。今も、本を読んでいる。
確かに、とっつき難いよな。

そんなことを考えていたら、突然、市村さんが口を開いた。
「西山、時々電車でいっしょになっていたな」

気が付いていたんだ。

「はあ。」

「なんで、声かけない」

それは、こっちのセリフだろう、と言いかけたが

「す、すいません。お、女の方とごいつしよだったので、俺は何を言ってるんだ！」

しかし、市村さんは笑った。初めて見た。

「あほ。俺の彼女と思ったか？あれが？中1だぞ。」

俺の妹の同級生だ。」

おかしい。じゃ、なんで妹がいないんだ？

「なんで、妹がいないのか、思ったろ」

にやにやしながら市村は続けた。

「妹はな、今入院してるんだ。あの子と同じテニス部なんだけど、けがしちゃってな。」

「おおきなケガですか？」

「いや、ただの骨折。たいしたことない。」

たいしたことない、ということはないだろうけど。

「じゃ、吉川さんとは、別に・・・」

「？何で名前知ってるんだ？俺、言ったか？」

しまった。いや、別にかまわんか。

「いや、坂本と同じ小学校とかで、この前、たまたまいつしよに練習することがあったもんで」

「ああ、そういや、うちの1年で知ってるのがいるって言ってたな。坂本のことが。」

まあいいや。桜花女子とは同じ系列だからな。そのうち交流会があるよ。」

「そうなんですか。」

「ああ、俺は妹が来るからいやなんだけだな」

市村さんて、けっこうしゃべるんだ。

それとはかく、ひとつ謎がとけた。謎ってほどのもんでもないか。でも、正直なところ、少しうれしかった。

合宿は3日間。あつという間かなと思っていたが、とんでもなかった

た。

けっこうきつい。

最終日に、順位戦するらしいけど、俺、持つかな。

合宿所は毎年同じで、峰山荘という民宿だ。

経営者が東光OBで、格安にしてくれているそう。

俺たちの合宿中は貸切だ。

そりゃそう。俺たちのようにきたないのがいっしょだと、

大浴場にほかのお客さんは入れないよな。

それをいいことに、合宿所ではほんとにノビノビさせてもらっていた。

2日目の夜、同じ部屋の坂本が言った。

「おい、ビデオ見よう」

「ビデオ？」

「おお。百円で、10分だ。」

「！成人向けってやつか？」

「そうだ。」

「まずいだろう、それ」

「なんで」

「なんでって、先生入ってきたらどうすんだよ。」

「誰が見張ればいい。お前、最初に見張ってくれ」

同部屋の、ほかの3人もうなずいている。

これは、同調するしかない。

「わかった」

とりあえず、入り口に近いところで外の気配を確かめた。静かだ。これなら、ほかの部屋の扉が開いたらわかる。

「OKだぞ」

「よっしゃ、100円いれるぞ」

しかし・・・

「あれ、うつらないぞ。」

「おかしいな。100円入れたよな」

バンバンとテレビたたくやつもいる。

その音で気が付かなかった。

いきなり、ドアが開いた。

「こら！」

タツチだった。

なんでわかったのか。バレたのか。

「あのな、成人向け放送はな、おまえらみたいなのが泊まる時は中止してるんだ、ここでは。」

そういうことか。

「それにな、どの部屋で見ようとしたかわかる仕組みになってるんだ。」

社会をなめるんじゃないぞ。」

「先生、100円は返ってこないんでしょうか？」坂本がおそろおそろ聞いた。

「当然だな。ペナルティーだ。誰が入れたかしらんが、全員で負担することだな。」

まあ、好奇心から見たいのもわかるがな、明日は順位戦だぞ。

しっかり寝とけ。消灯！」

大人への入り口は、まだまだ遠いのだ。

第13回

佐久間美紀は悩んでいた。

平田にメールを打つか否か。

あたしらしくない？

平田君はあゆに気がある。それはわかってる。

でも、あゆはまったくその気はない。

なら、友達裏切ることにならないよね？

よし。ピッ。

今日はありがとう。また教えてね。

たったこれだけのメール、なんてことはない。

ただ、返信があるかどうかだ。

えい、もう打っちゃったものはしょうがないよね。

それより、あゆだ。

わざわざ、親に電話して迎えに来てもらった。

なんで？坂本君の車に乗ればよかったのに。

おかしいのは、

「親が来ることになってるの」と、言ったあとで

家に電話してたことだ。終わったことを知らせていたんじゃない。

「悪いけど、迎えに来てくれる？」と言ってた。

わざと、残った？なんで？

まさか、あのどんくさ君と話したいから？まさかね？

でも・・・

美紀は大変な誤解をしていた。

亜由美は父親と迎えに来てもらう約束をしていたのだ。ところが、来れないとなつたので、母親に

「悪いけど、迎えに来てくれる？」と、言ったのだ。
電話したのは、終わったことを知らせるためだったのだ。
悲しいかな、西山のことなど、その時点ではまったく頭になかったのだ。

が、この大誤解は美紀に勇気を与えていた。

これであゆに遠慮することはない！と。

時に、人には、自分で自分の背中を押す理由があるのだ。

その大誤解の張本人、亜由美は机の前で宿題プリントを開いていた。
生物が好きだった。人間が不思議だった。感情ってなんだろう。
なんで、泣いたり、笑ったりするんだろう？

人の体を構成するものの中から、なぜ感情が生まれてくるんだろう？
感情ってめんどくさい、と思う時さえある。

でも、そう思うのも感情だ。

と、その時、携帯がなった。

「もしもし」美紀だ。

「ああ、なに？」

「あのさ、あたし平田君にメールしたんだ」

「へえ、メアド、ゲットしたんだ。やったじゃん」

「でね、返事来たんだけどさ。」

「いよいよ、やったじゃん」

「それがさあ、最悪。」

「どうしたの？」確かにへこんでる。

「また、テニス教えてね、て打っただけどさ、返ってきた返事がさ、

『また吉川さんも誘っていつしよにやろうね』だってさ。」

「ふーん」

「ふーん、じゃないよ。あたし、どうしたらいい？」

ああ、めんどくさい。感情ってほんとめんどくさい。
返す言葉もなく、黙っていると

「あゆ、平田君のこと、なんとも思っていないよね？」

「うん。全然。」

「ほんとよね」

「ほんとだって。」

「じゃあ、あのどんくさ君は？」

「どんくさ君？」

実はすぐに、西山君のことだとわかった。でも、思わずとぼけた。

「今日来てた、坂本のともだち！」

「ああ、西山君？なんで？」

「だって、もしかして、なんか気になってない？」

するどいなあ。なんで、わかるんだろう？でも、そんなじゃない、
と思うんだけど・・・

「やっぱり！」

「ちょっと、早合点しないでよ。あきれて口がきけなかっただけ」

「ふーん。そおかなあ。ま、好みは人それぞれだからね。」

とにかく、あたしは平田君をあきらめないからね。今度、また

坂本使って平田君誘うから、絶対来てよね。」

坂本君はなんなの？なんかかわいそう。でも、そしたら、西山君も
来るかも。

「わかったよ。せいぜいがんばってね」

「あ、突き放し！ひどおい。ま、よろしくね、バイバイ」

なんか、めんどくさいけど、少し楽しい？

第14回

いよいよだ。

今日まで、サーブとボレーを必死で練習してきた。

ストローク戦では絶対に不利になる。

いいポジションで打てればそこそこやれる自信はある。

しかし、その自分がうまく打てるポジションに入る

足が俺にはない。

サーブで崩して、ネットダッシュ、そしてボレーで決める。

抜かれたらあきらめる。これしかない。

ただ、それはファーストが入った時だ。セカンドの時にはどうする？

ラリーになる。相手を左右に振れるか？深い球が打てるか？

ああ、悩んでもしょうがない。やるしかないんだ。

それにしても、初戦が長谷川とは。ま、考えようだ。

負けて当然。ひきずる事はない。最初に一番強いやつとやるほうがいい。

橘は楽しみにしていた。

今年は、面白いのがそろった。それぞれ個性がある。

実は、団体戦のメンバー構成の案はできていた。

番狂わせはあるか？

あるとすれば・・・

長谷川は考えていた。手ごわいのはいるが負けるとは思っていなかった。

どう勝つかを考えていた。特に初戦の西山には圧勝しなければ。

俺の強さを、全メンバーに見せ付けてやるんだ。

俺がエースなんだ。

これは、傲慢でも、自信過剰でもなかった。事実、他を寄せ付けな

い強さがあつた。

長谷川のシングルス1は規定路線だった。

そして、全員が注目する中、長谷川の初戦が始まった。

1ゲーム、6ゲーム先取。橘も西山が1ゲーム取れるかどうか、と思っていた。

しかし、予想外の出来事がおきた。

まず、サーブを取った西山がいきなりゲームを取ったのだ。

それも、サーブスエース4本で。ありえない事だった。

西山が最初に打ったサーブに、長谷川がまったく反応できなかった。

いつのまに・・・

橘は自分の不明にあきれていた。確かに西山はよくサーブの練習をしていた。

なかなか速いサーブを打つようになっていたようだった。

しかし、普段の練習ではみんな普通に返していた。

それが、今、目の前で見たサーブは全然違う。

速い上に、バウンドしてからのコースがとんでもなく変化する。

長谷川といえども、1ゲームの中では対応できなかったのだ。

よしよし、みんな驚いてやがる。本邦初公開だからな。

なんせ、あの平田が受け損ねたんだからな。

とにかく、慣れられるまでにできるだけファーストを入れ続けるしかない。

長谷川は動揺してる。今のうちに、もしブレイクできたらなあ。

「フォルト！」

案の定、長谷川のやつ、サーブが狂ってる。セカンドを深くリターンするぞ。

こうして、大方、いや、全員の予想を裏切って、西山がリードする展開になった。

さすがに長谷川も、途中からは気を取り直して、自分のサービスゲームは何とかキープしていた。

しかし、西山がこのサービスゲームを取れば終わる。

まだ、西山のファーストサーブを一度も返せていない。そして・・・

「ゲーム、西山！6 - 3！」

なんと！勝ったぞ！長谷川に勝ったぞ！

まさか、ここまで通用するとは思っていなかった。

秘密兵器にするつもりだったので、全員練習では打っていなかった。逆に、どれくらい通用するのかもわからなかった。ぶっつけ本番だったのだ。

結果的には、大成功だった。

まあ、次はやられるだろうけどな。

ただ、そううまくいくわけがないのであって、結局順位は10人中5番だった。

けっこう負けた。疲れてくると、ファーストの入りも悪くなる。

それに、あとから当たるやつは、みんなかなり下がって待つようになった。

坂本なんか、なんとか当てて返してくる。まあ、それを俺が決めればいいんだが、

これがミスるんだな。

でもまあ、上出来だった。とりあえず、7人のレギュラー枠に入っただけだからな。

大満足だった。

長谷川もたいしたもんだ。結局、俺以外には全部勝った。文句なく1番だ。

「西山」

タッチが、全試合終了後、俺に声をかけてきた。

「はい」

「よくがんばったなあ」

「はい。秘密兵器つてのは姑息でした」

「いや、そんなことはない。今日にかける気持ちの勝利だと思うぞ。それより、お前、あのサーブ、誰に教わったんだ？」

「原口さんにヒントをもらいました。それで、たまたま、一度打てたんです。」

それを何とか意識して打てないかと練習してました。」

「そうか。原口ね。きのう帰った市村と原口にも見せてやりたかったな。」

「ですね。でも、俺は他がまだまだですから。」

サーブなんて慣れられたら返されますから。」

「そうだな。あとは、セカンドを磨くことだな。」

とにかく、お前にはダブルスやってもらったもりだ。

夏休み明けには、誰と組むのがいいか、試してみるつもりだ。

とりあえず、ダブルスの勉強しといてくれ。」

「わかりました。」

よし、思い描いていた通りの展開だ。

しばらく学校での練習はないけど、また坂本とでも練習しとかないな。

「西山！」坂本だ。

「おう。」

「お前、やるな。平田に打ったやつ、マスターしたんだな？」

「ああ。俺はお前みたいに足速くないし、長いラリーじゃ勝ち目ないからな」

「なるほどなあ。自分をよくわかってるってことか。」

「そういうこと。それより、また竜王山で練習しようや。」

「そうだな。お前のサーブ受ける練習したいし。」

「ああ、1本100円で打ってやるよ」

「けっ、ならリターンエースとったら200円とるぞ。」

こうして合宿は終わった。

帰ったら、宿題だあ。

第15回

二期が始まった。

中学1年というのは、まだまだ子供だ。

と、言う人がほとんどだろう。

それは、単に先に生まれただけの者に言う資格はないのだ。

誰でも、14歳を通る。その時の過ごし方が問題なのだ。

うまく行かないのが普通だ。もんもんとするのが普通だ。

怠けてしまいたくなるのが普通だ。逃げてしまいたくなるのが普通だ。

でも、結果として、何とかぐり抜ける。

自分の生きた14歳に自信をもてない大人が、14歳を子供扱いする。

長く生きればいいわけじゃない。どう生きたか。

校長の話は長い。いい話だが、何回目だ？

覚えてないんだろうか？

こういう時は、山を見る。

校舎の裏はすぐ山だ。生物部の連中は時々いろんなものを採集しに入る。

俺らも時々ランニングで登る。

頂上まで登ると、実は桜花女子の校舎が見える。

双眼鏡持って登るやつもいる。

俺も、今ならそうするかもな。

あれから、なんだか気になる。

道で桜花女子の制服見ると、ドキッとする。

俺も、ようやく芽生えたか？

でもなあ、なんかなあ。

今、俺が一番したいことはなんなんだろう？
よくわからなくなってきた、今日この頃だ。
しかし、ああ、まあいいや。中学生なんて、非現実的なものだ。

それより！新人大会だ。

俺は気の合う坂本と組みたかったが、あいつ。

「俺はダブルスなんて、やだね。」

などと、あっさり言いやがった。

そうになると、あとのメンバーからすると

4位、内山。6位、佐々木。7位、鈴木。

たぶん、内山とのペアが一番いいんだろうな。

すばらしく粘り強い。少々のことでは、抜かれない。

相手が根負けするのだ。

内山が後ろにしていると安心だ。

ま、俺が選べるわけじゃないんだけどな。

ああ、早く本格的にダブルスの練習がしたい。

お、やっと話が終わった。

その頃、亜由美は少し困っていた。

昨日、平田と坂本から電話を受けていたのだ。

それも、同じ内容の。

「吉川さん、今度、市のジュニア大会に出るんだ。見に来てくれな
いかな。」

「おう、吉川、今度さ、平田が出る大会があるんだ。よかったらい
つしょに

見に行かないか？」

坂本君と行けば、平田君はどう思うだろう？

一人で行って、坂本君と会ったら、どうなる？

どっちも、友達だ。私には。

でも、二人はそうは思っていないよね・・・
と、そこへ、カバンの奥で携帯が震えた。

「平田君の試合、見に行かない？」美紀だ。
これだ！救世主！

美紀に誘われて先に約束してたから、と言えば
どちらも仕方ないと思ってくれるだろう。

で、なんでこんなに気をつかわなきゃいけないのかな。
だから、感情つてめんどくさい。

それより、西山君は見に行くのかな・・・

なんか、気になる男子。んん、なんでかな。

よく知らないのに。だいたい、向こうはどう思ってるんだろう？
私のことなんか、全然気にしてなかったら・・・

ま、いいわ。14歳の女の子なら普通よね。

花より、男子ってか。

本当に何かおきるなら、また偶然会ったりするよね。

平田君の出る大会、見に来るかどうか。

そこで、また会えば、何かおきる。

そういうことにしておこう。

なんか、楽しくなってきた。

第16回

鈴木は、少し落ちていた。

なんで俺、あんなこと言ってしまったんだろう。
俺が悪いのに。

昔から、そうだ。なぜか、人に指摘されたり、注意されると素直に聞けない。

つい、言い返したり、言い訳したりしてしまう。

どうして俺はこうなんだろう。

せっかくレギュラー枠にすべりこんだのに。

どうしたら変わるんだろう・・・

事のおこりは、こうだ。

どういうわけか、橘はダブルス2に西山と鈴木を指名した。

全員が意外な顔をした。

西山はダブルス1ではないのか。内山も自分が西山と組むものと思っていた。

当の西山は、少し意外そうな顔はしたものの、

「鈴木、やろうぜ」と、声をかけた。

鈴木も、その時は西山に笑顔で応えていた。

その後、シングルスメンバーとダブルスに別れて練習が始まった。

ダブルス1は内山、佐々木。

西山はもう、サーブを隠さない。

次々とサーブエースを決める。

「また速くなったんじゃないの、すげえな。お前。」

サービスリターンに関しては、長谷川にひけをとらない内山でも悲鳴をあげていた。

しかし、それを見ていた鈴木は心中おだやかではなかった。

自分には武器がない。俺のサービスゲームばかりが破られてしまう

んじゃないか？

まずいぞ、これは。

そんな風に思い始めると、鈴木の良さである思い切ったフォアハンドも、

いまいち自信のないサーブも、力んでしまつてミス連発だ。

「おい、鈴木、練習にならないぜ。入れてくれよなあ」

佐々木が言った。

「あんまり力むなよ。練習なんだしさ。」

内山も言う。

その通りなのだ。それにいつも言われてることで、なんということはないはずだった。

なのに、

「どうも、ガットの張りが悪いみたいだ。ラケット変えるわ」

などと言うものだから、

「道具のせいにすんじゃないやねえよ」と、佐々木。

これで、切れてしまった。

「うるせえな、ガットだよ！それに、少しフォームを変えてる途中なんだよ！」

内山も佐々木も、またかという表情になっている。

ラケットを取りに行く背中、内山が言った。

「西山、お前、ついてないな」

その後の練習は散々だった。

自分がいやになっていた。

終了後、一人そそくさと学校を出た。

自分をのしりながら。

誰にも会いたくなかった。

ところが、駅に着くと、どういいうわけか西山がいた。

「あれ、鈴木、お前電車だったっけ」

バス停で、みんなと一緒にになるのがいやだったのに・・・
よりによって、西山か。

「あ、ああ。今日は悪かったな」つい、言ってしまった。いや、言えてしまった。

「気にすんなよ。俺もけっこうミスったし。

それにしても、お前、力入れすぎだよ。

普通に打っても、十分な威力だろ？」

「そうかな。」

「そうかなって、それでお前レギュラーに入っただろう？」

お前のフォアは、速いよ。ちよっと、あぶないけど」

西山。こいつはよくわからないやつだ。

でも、なんか気が抜ける、というか肩の力が抜けていく。
血の上った頭が、スツと冷めていく感じだった。

自然体。それが一番似合うやつだ。

妙になぐさめたり、はげましたりしない。

しかし、それがありがたい鈴木だった。

第17回

平田は順調に勝ち進んでいた。

中学生相手に負けるわけにいかない。

小学6年生の時にも、中学3年生に勝った。

相手が小さいと、必要以上に力んでしまうものだ。

ただ、次にあたる佐藤というのは手ごわいはずだ。

今年、関東から転校してきた佐藤は、去年の関東ジュニアの地区大会で

優勝している。体も大きい。

平田は初めて対戦する相手をかなり警戒していた。

その時、ふと西山のサーブを思い出した。

見えなかった、あのサーブ。

すると、なぜか気が楽になった。何を気負ってるんだ？

中学からテニスを始めた同い年のサーブさえ受けられなかった。

そくだよな、俺なんかたいしたことないんだ。まだまだだねってか。

平田は、もう怖くなかった。

いきおいをつけて立ち上がり、コートに向かった。

美紀はいらいらしていた。

亜由美が来ないのだ。もう、平田の準決勝が始まってしまっ

最初から見る必要ないだろう、ということとで時間決めたのに。

もうおいて行こうと思ったその時、

「ごめん！」亜由美だった。

「もお、なにしてんのよ！早く！」

すでにゲームは始まっていた。

佐藤のサーブからスタートしていた。

スコアは？

なんと、0 - 4 0。いきなり、平田はブレイクチャンスを迎えていた。

「すごい。相手の人、おっきいのにね。」

「うん。それに、なんだか平田君、余裕あるよね」

佐藤のサーブは速かった。美紀や亜由美の目には、とてつもなく速く見えた。

あんなサーブが来たら、逃げる間もないだろう。

なのに、平田は軽々返した。

ダッシュしてくる佐藤のサイドを見事に抜き去った。

結果は平田の圧勝だった。

美紀が平田に駆け寄った。

「おめでとう！すごいね！事実上の決勝戦でみんな言ってたのに！」

「ありがとう。実は、西山君のおかげかも」

西山君？亜由美は思わず、耳をそば立てた。

「え？なんで？あのどんくさ君？」

相変わらず、美紀の西山に対しての評価は超低い。

「いや、俺も実はびびってたんだけど。」

一緒に練習した日に、西山君のサーブ受けられなかった。

すごいサーブだった。

あれに比べたら、佐藤さんのサーブは速いだけだからね。」

そうなんだ。へえ。けっこうすごいんだ。

「でもさ、そんなにすごいんなら、なんで東光でダブルス2なのよ」
美紀の情報収集はすごい。なんで知ってるの。

「ダブルス2？そうなんだ。確かに西山君はシングルス向きじゃない。」

でも、ダブルスはけっこう行けると思うよ。でも、2か。

東光の先生も考えたなあ。」

「何を考えたの？」

美紀が変わりに全部聞いてくれる。

「想像だけどね・・・団体戦ていうのは3勝すればいいわけだ。

もし、シングルスで2つ勝ちが見込めるなら、力の落ちるダブルス2に

強いダブルスを当てたら確実だ。」

なるほどね。そういうものか。

「ま、来週の新人大会が楽しみだね。」

「そうか。私たちががんばらないとね、亜由美。

平田君、応援に来てくれるよね？」

「ああ、今日来てくれたしね。西山君や坂本も応援したいし」と、いいながら亜由美を見る平田だった。

第18回

その頃、坂本と西山は市ジュニア大会会場にようやく到着していた。どうせ平田は勝ち進むに決まっているだろう。

そんなに早く行く必要ないだろう。

などと、適当に時間を決めて来たのだが、次が

もう決勝戦とは思っていなかった。

「おい、やばかったな。」

「ああ、でもやっぱり平田すごいな。」

自分たちのいい加減さの反省もせず、決勝の行われるセンターコートに向かった。

センターコートだけは立派だ。

何年か前に国際大会が行われたため、改装されていた。

観客席がぐるっと取り囲んだコートは主役の登場を待っていた。

ほぼ満員の観客の中には、今から試合をする2人に敗れた選手も多くいた。

その中には、準決勝で平田に敗れた佐藤もいた。

あまりの完敗に、自分のどこがいけなかったのかさえわからなかった。

このまま帰るわけには行かない、と思った。

平田のプレーを冷静に、客観的に見たかったのだ。納得しなかったのだ。

そんな真剣に見つめる人間もいるというのに、お気楽な2人は

(もちろん、SとNだが)

お互いに気づかれないように、亜由美の姿を目で探していた。

「あ、佐久本がいるぞ」

坂本が見つけた。

けつ、何が佐久本だと。探してたのはその隣だろうが。などと心中で毒づきながら、先に発見されたことがくやしい西山だった。

「どこ？」

「あれ、スコアボードの真下の席」

「お、いいところ座ってんなあ」

「そりゃ、早くから来てたんだろう。お前のせいだぞ」

「なんで、お前が早くから行っても暑いだけだ、なんて言うからだろうが」

「うるさい。出てきたぞ！」

平田が先に出てきた。小柄だ。

その後、出てきたのは、なんと東光の先輩だった。

「なんで？石川さん、準決勝で負けたはずだろう？」

坂本が言つと、隣の席にいたおじさんが言つた。

「準決勝の相手が、体調不良で辞退したんだ。特例で石川が進んだ。」

「

「そうなんですか、ラッキーだなあ」

「人の不幸をラッキーなどというな！」

いきなり、しかられた。よく見ると、東光の物理の先生、澤田だった。

「あ、先生でしたか」

「坂本、お前、注意散漫なやつだなあ。気づかんか、普通。」

先生、違つんだよ、こいつ吉川亜由美を探すの必死だったからですよ。

「す、すいませんでした。」

でも、面白いことになりましたね」

「ああ、石川のことだから、ただでは負けんだろう。何かやるぞ」

「負けますか」

「ああ、普通にやれば勝ち目ないな」

そつたろつなあ。石川さんは3年でトップだが、相手が悪い。

でも、頭が良くて勉強でもトップクラスだ。何か考えているい違いない。

西山も期待していた。

が、期待は見事に裏切られた。

平田が強すぎた。

石川は色々しかけるのだが、まったく通用しない。逆に平田は実にオーソドックスな攻め方で通した。ラリーでも、ネットでも主導権を譲らなかった。

6 - 3。

石川だってつまらないミスもなく、よく戦った。

しかし、スコア以上の差があった。

西山はあらためてシングルスのおツブプレイヤーのすごさを感じていた。

しかし、もしダブルスなら、とも考えていた。

平田の良さを消す攻め方があるのではないか、などと厚かましいことを

考えてもいた。

「おい、出ようぜ。じゃ、先生、失礼します。」

「お、まっすぐ帰れよ」

どういう意味だよ。ガキあつかいだな。

ま、ガキだけど。

坂本は、佐久本美紀は絶対の平田のところへ行くと読んでいた。

すなわち、平田のところへ行けば、そこに亜由美もいるはずだと。

西山も読んでいた。坂本について行けば、その先に亜由美がいるはずだと。

目的だけは共通の2人は、すぐに結果を得ることができた。

案の定、美紀は平田が着替えて控え室から出てくるのを待ち構えて

いた。

そして、その隣には所在なげに亜由美が立っていた。

「お前ら、来てたんだな」坂本は声をかける。
なんとしらじらしい、と西山は思ったが。

先に亜由美が気づいた。

西山君。会った。何かがおきる・・・かな？

第19回

俺は考えていた。

坂本と平田は亜由美が好きだ。

佐久本美紀は平田が好きだ。

で、俺は？もちろん、亜由美の事が・・・

しかし、亜由美は？

それがわかれば、この複雑？な連立方程式は簡単に解けてしまう。

しかし、こいつはできればすぐに解きたくない。

いや、解くのが少しこわい。

西山君が私を見てる？

いや気のせいかな。

何かおきると勝手に思い込んでいた自分がバカに思えてきた。

と、うつむいた時、

「吉川さん」西山だ。

「あ、応援来てたのね。平田君すごいね」

「ああ、すごい。」なんか、ぶっきらぼう。

「でもね、平田君、言ってたよ。西山君のおかげかもって」

「え？」

「西山君のサーブの方がすごかったって。」

「ああ、あの時の。ん。でもね、なかなか続けて打てないんだ。練習してるんだけどね。新人大会までに完成したいんだ。」

「ダブルスだってね」

「俺にはシングルスは無理だから。最初からダブルスねらってたんだ。」

「そっぴや吉川さんは？」

「私も、美紀とペアでダブルス」

「そうなんだ。」

「女子は今度の土曜日、男子は日曜日だっけ」

「そう、確か。土曜日、応援に行くよ。」西山がさらっと言った。

「本当に？」亜由美は、起きた、と思った。

「うん。」西山は自分が言った事に照れているようだった。

ところで、ここまでなぜ坂本の邪魔が入らなかったのか？

なぜ、西山が一人勝ちの状況になったのか？

それは美紀のおかげであつた。

美紀は亜由美と西山が何とかなればいいと思っていた。

そうすれば、平田も亜由美をあきらめるだろう・・・

坂本でもよかつたのだが、この際どちらでもかまわない。

で、うまく坂本と平田を足止めたのだ。

坂本と平田は焦っていた。

気が付くと、西山と亜由美がツーショットになっている。

なんたることだ！

美紀のお目当ては平田だ。

じゃあ、俺はどうなる！と坂本は怒った。

あぶれてるじゃないか！

西山のやろう！

中学1年といえども、色々大変なのだ。

その頃、新人大会の組み合わせ抽選が行われていた。

東光学院からは、顧問の橘が出席していた。

昨年の優勝、準優勝校は別のブロックに入る。

あとは抽選だ。

と、言っても参加は全部で10校しかない。

市内で硬式テニス部のある学校で団体戦が組める学校は限られているのだ。

「橘先生。どうですか？今年は」

昨年優勝の修実学園の顧問、柳沢が声をかけて来た。

「いやあ、なかなか」

余計なことは言うまい。

「うちは、今年も有望な1年が多く、選ぶのに一苦労でしたよ。うちでなければ、十分出場できる子がたくさんいます。」

相変わらず、嫌味なことを言う。

「うらやましいですなあ。多分、その子達、うちも

受験してたんでしょうねえ。残念です。」

これが、精一杯か。どうだ、柳沢。

実際、修実学園には東光学院を落ちて入っている生徒が多い。さすがに柳沢も、表情がこわばっていた。

しかし、最後に言い捨てた。

「そうですね。まあ、テニスくらいはうちに花持たせてくださいね。」

是非、うちと当たるところまでいらして下さい。

心より、お待ちしておりますので。」

見てろよ、柳沢。と、言いたかった橘だが、

手元にある決定した組み合わせに目を落とすと現実が待っていた。

1回戦、青田中。去年2回戦で負けた。

もし勝ち上がったって、次は多分城南中。ここは昨年3位。

万が一城南を破れてようやく準決勝。ここで当たるのは

多分甲北大付属。ここは、近隣の県からも選手が入ってくる強豪だ。

昨年準優勝。

柳沢、いや、修実と当たるのは大変なのだ。

ううん。うなるしかない橘だった。

第20回

私立の進学校というのは、当然のことながら授業の進み方が速い。

レベルも高い。

そもそも、生徒を選抜しているのだから

それでいいわけだ。

ただ、全員がついて行けるわけでもない。

どんな集団でも必ず順位がつく。

小学校では勉強で人後に落ちることのない子供ばかり

だったのが、入学してから自分の上には多くの人間がいる

現実をつきつけられる。

問題は、それが単にテストの結果に基づく順番なのに

人格まで順番がついてしまうかのように錯覚してしまう事だ。

成績で下位に沈むと自分が否定されてしまったように感じてしまう。

それが、ほかの事にも影響を与えてしまう。

それでも、他に何か秀でているものがあり、それなりに

存在感を示せれば自信が持てるものだ。

これは、学校間でも言えることだ。

スポーツで抜群の結果を残す学校は、それなりに

自信とプライドがみなぎっている。

東光学院の一回戦の相手、青田中学はまさにそういう学校だった。

私立だが、俗に言う進学校ではない。併設されている高校は

多くのスポーツが全国レベルだ。

テニス部の強化は近年のことだが、めきめきと力をつけていた。

昨年、はじめて東光も破り、甲北大付属にも善戦した。

今年は何とか決勝まで進むことをねらっていた。

まずは東光だ。シングルス1の長谷川以外はたいしたことないはずだ。

青田中顧問の石田はそう読んでいた。

特にダブルスには自信があつたのだ。

シングルスで1つものにすれば勝てる、そうふんでいた。
なのに……

計算通り、シングルスは2、3と取った。

あとは、ダブルスで1つ勝てばいい、楽勝だ。の筈だったのに。

いや、ダブルス1落としたのはまあいい。

こちらはあえて2に実力がある方をおいたのだ。

負けるはずはない、はずだったのに。

西山という選手のサーブだけでやられた。

すごいサーブだった。中学1年とは思えない。

終わったあと、以前から知り合いの東光の顧問、橘のもとに
駆け寄った。

「た、橘さん。」

「やあ、石田先生。いい試合でしたね。ありがとうございました。」

「いや、こちらこそ。それより、あの、西山という選手。」

「すごい選手ですね。」

「いや、サーブはね、いい球打ちます。確かに。」

でも、中学入ってから始めたんですよ。他はまだまだです。」

「いやあ、それにしてもすごいサーブだった。」

「ええ、教えたわけじゃないんですがね。足はおそいし、不器用だし、

何か1つ人に負けないものを、と思つたらしく、サーブの練習は
よくやってみましたね。」

「なるほどねえ。さすが、東光さんだ。」

「いや、学校は関係ないですね。たまたま、あの子がそうだっただけで。」

早くから、ダブルスで行けと進めてはいましたが、本人もその気になったのが

良かったんでしょうねえ。」

まあ、こんなわけで西山はいいところ取りで一回戦を終えた。

鈴木も緊張しながらも、そんなに力むこともなくいいプレーに終始した。

2人にとっては最高のスタートとなった。

西山はうれしかった。シングルス2つとられて、結局自分たちの結果で決まることにはプレッシャーを感じたが、最初のサーブで調子に乗れた。

それに、なにより亜由美が応援に来てくれていた。ただ、いつものように

美紀があり、平田もいた。しかも先に負けていた坂本までいた。自分

負けてプレッシャーかけといてにこにこ亜由美に話かけていた。なんてやるうだ。

それはともかく、昨日のことを引きずっていない亜由美の様子にほっとした。

第21回

いきなりダブルフォルト。

「どんまい、あゆ」

美紀はいつものように笑顔で声をかけてくれた。

そうだ。まだまだ。

しかし、次のファーストも入らない。

トスが狂っている。そう、思ってしまった。

実は、緊張で力が入っていただけなのだ。

それに気づいていれば、自然に修復できていただろう。

おかしい、何とかしなければ・・・と思ってしまった瞬間から

よりくるってしまい、最後まで思い切ったサーブが打てなかった。

結局、1回戦で敗退。

勝てない相手ではなかった。

でも、これが実際の實力なのだ。

試合で出せる力が「實力」なのだ。

自分の精神力の弱さに落ち込んだ亜由美だった。

美紀は何も言わなかったが、腹を立てていただろう。

ごめん、美紀・・・

ごめん、みんな・・・

チームの足を引っ張ることのつらさを始めて知った亜由美だった。

「きついな、あれは。つらいぞ」

西山はつぶやいた。

「そうだな。可愛そうに・・・」

坂本もうなずいた。

「練習でできることが、實力じゃないんだよな。」

試合で発揮できる力が問題なんだよな。」

「鈴木の気持ちも分かる気がするな・・・」

「え？」

「だってそうだろ。練習でも鈴木がターゲットにされる。ねらってたら」

「力んでミスるからな、あいつ。」

確かにそうだ。俺は別に気にしてないけど、鈴木もつらいんだろうな・・・

いや、鈴木だけのことじゃない。俺も同じだ。

俺の唯一の強みであるサブが、明日、全然入らなかったら。

そうだ。2人が普段通りの力が出せるかどうかだ。

気持ちを強く、しかもリラックス。これだ。

具体的にどうすればいいのかはわからない。

でも、これに気づくことができただけでも絶対に違うはずだ。

ただ、落ち込む亜由美の姿を見ながら、不謹慎にもそんなことを考えていた自分に

気づき、いやになった。

しかし、どんな言葉をかけたらいいのかわからない。

「おい、西山、行くぞ」

「あ、ああ。」

坂本は無頓着に亜由美と美紀の方に向かう。

「おしかったね！」

おしくない。2 - 6 だぞ。

先に美紀が口を開いた。

「うん・・・ま、これで終わるわけじゃないしね！亜由美、もういいよ。元気だしなよ。」

これ以上、あやまつてばかりいたら、あたしおこるよ？さ、着替えに行こ」

「そうだよ。これが、スタートなんだから。」

思わず、西山は言った。亜由美が顔を上げた。

「スタート・・・か」

そうだよ。最初からうまく行くわけない。
西山君、言葉は少ないけど、心に響くこと言ってくれる。
やっぱり・・・

そのあと、亜由美は笑顔を取り戻した。

先生にはかなり小言いただいてしまったが、

「これがスタート」

と自分に言い聞かせていた。

翌日、試合会場についた西山は鈴木を探した。

鈴木は壁うちをしていた。

「鈴木！早いな」

「おう。なんか、じつとしてられなくてさ」

もう、汗だくになっている。

「あんまり、張り切るなよ」

「何言ってるんだよ、勝ちたくないのかよ」

「勝つさ。普通にやりや勝つさ。」

「え、えらい自信だな。どっからくるのその自信」

「そんなもんは別にない。たださ、練習でやってきた以上のことは
できないしさ。」

それよりさ、作戦考えようや。」

「作戦？」

「おう。と言っても、いつも練習でやってたことの確認だけだな。」

「練習でやってたこと？」

「ああ。お前、サーブ打つ前とか、相手のサーブに構える前とかの
リズムあるだろ？」

「ん？あんまり意識してないな。それは。あつたっけ？」

「あるよ。サーブの前にはボール3回バンドさせるとかさ」

「ああ、なるほどな。」

「舞い上がったら、それ忘れんだよ。多分。」

だから、ゲームの入りではそれをあえて意識してやるんだよ。
すると、力が抜ける。」

実は、テニスのガイド本の受け売りだったが。
結果的には、これが良かった。

スムーズに試合に入ることができたのだ。

昨日の亜由美の姿を見たおかげだな。

心の中で、亜由美に感謝する西山だった。

第22回

東光学院は2回戦の城南中にも勝った。

エースの長谷川が不調でシングルス1を落としたにもかかわらず、あとを全部とった。

どの試合も接戦にはなったが、押し切った。

西山と鈴木は1回戦突破で無駄な力が抜け、スコアこそ6 - 4だったが相手にブレイクを許さなかった。

甲北大付属の監督、水沢は自校の試合は見ず、東光と城南の試合を見ていた。

長谷川以外はマークしていなかった。

おそらく次の相手は城南とふんでいた。
ところが・・・

シングルスで2つは絶対とらなければまずい。

あのダブルス2は危険だ。

あのサーブが今の調子決まり続けるとおそらく勝てない。

何か策が必要だ。

何とか、リズムを狂わせる必要がある。

気持ちよく打たせていてはだめだ。

さて、どうするか・・・

水沢の頭はフル回転していた。

甲北大付属は1回戦、2回戦と圧勝していた。

あまりに相手との差がありすぎた。

あまり体力を消耗することなく勝ち上がったことは
好ましいことではある。

ただ、接戦を制して自信をつけて来た相手とやる時に受身になってしまわなければ、の話だ。

さて、どうなるのか？

その頃、小さなアクシデントが起こっていた。

長谷川は右手首に違和感を感じていた。

城南中との試合中、バックハンドで返した時に一瞬だが電気が走った。

長谷川のバックはシングルハンドだ。

城南中のシングル1、川崎のフォアからの強打を

その後バックでは返せなくなっていた。

他のメンバーの頑張りで勝ちあがることはできたが、もう勝てない。

いや、それどころか、試合に出ることも無理だろう・・・

「先生、すいません・・・」

橘はうなだれる長谷川に言った。

「まったくだ。なんで、そうなるまで、無理をしたんだ。

まあ、お前に負担がかかりすぎだった。

すまなかったな。

しかし、大丈夫。みんな頑張るさ。

まだまだこれからだ。みんなを応援しに行くぞ。」

しかし、橘は悩んでいた。

どうチームを構成するのか。

何より、あきらめてはいなかった。

どうすれば甲北大付属から3つ取れるのか・・・

シングルス1は捨てるしかないか・・・

と、考えた瞬間、「捨てる」という言葉が心に浮かんだ自分に対して怒りがこみ上げて来た。

負けるために試合する人間なんかいない。
なんて失礼なことを考えたんだ、俺は。
よし、勝つのが厳しいのは間違いないが、
絶対冷や汗を流させてやるぞ。
不適な笑みを浮かべる橘だった。

メンバー交換表を見た水沢は少し驚いた。
シングル1、西山。

ダブルス2の選手じゃないか。

いいサーブを打つ。東光で、勝ちが読めるダブルスだろう。
それをあえて・・・なぜ・・・

しよせん、ダブルス向きの選手だ。どう見ても、
うちの角田の相手ではない。

橘はいったい何を考えている？

「角田、まあサーブだけの選手だ。しかし、油断はするな」

「はい、どんなサーブが楽しみですよ」

しかし、その余裕は、消し飛んだ。

見えない。

確かに速い。しかも、バウンドしてからが見えない。
なんだ、これは？

角田は、テニスの試合で初めて恐怖を感じた。

もし、このサーブを続けられたら・・・

ブレイクするのは難しいかも知れない。

あっという間にファーストゲームが終わった。

西山は、コートチェンジをしながら笑いをこらえるのに苦労していた。
た。

橘はこう言った。

「いいか、とにかくファーストを入れる。」

ブレイクなんか考えるな。

とにかく、キープし続ける。

相手のサービスゲームは、適当にやれ。」

適当にか。なんて指示だ。

まあ、まともにラリーなんかしようとするば
振り回されて消耗するだけだもな。

というわけで、角田のファーストサーブが入った時は
動かないことにした。

セカンドの場合にだけ、思い切って打ち込むことにした。
すると・・・

角田は、絶対にキープしなければという思いから
慎重になりすぎていた。

それでも普通にやれば何と言うことはなかったはずだ。

しかし、精神状態がそれを許さなかった。

それに、西山のプレーにも戸惑った。

とにかく、ファーストは全くレシーブしない。

なんだ？何を考えている？

40-0。

とりあえず、あと1本決めればいい。

しかし、ファーストをわずかにはずした。

すると、西山が少し前に出た。

ふん。セカンドだからってなめんなよ。

西山は当たればラッキーくらいに考えていた。
きた！

速さはないが、高くはねる。

しかし、西山は自分の身長に感謝した。
届く！

手首の開放だ！

フォアハンドでストレートに返した。
入れ！

西山のレシーブは、ネットにつめた角田のサイドを見事に抜いた。
しかし、わずかにアウト。

「ゲーム、角田」

これで、1 - 1。

ただ、自分のセカンドは打ちこまれる・・・
いよいよプレッシャーを感じる角田だった。

第23回

プレッシャーというものは自らの心から生まれる。
ただ、角田の精神力は並ではなかった。

素直に西山を認める事ができたのだ。

先生はサーブだけの選手だなんて言ってたけど
それだけじゃない・・・

頭もいいし、度胸もある。

そこから角田の力みが抜けた。

西山のファーストは相変わらず返せなかった。

しかし、自分のサービスゲームは確実に取っていった。

西山のファーストが入り続ける保証はない。

チャンスを待つんだ。

ところが・・・

西山という選手は不思議なやつだ。

橘は妙におかしかった。

あいつはプレッシャーなんてものとは無縁なんだな。

確かに西山のプレーには変化がない。

淡々とサーブを決め、キープを続けている。

相手の角田はあきらかに力が抜け、いいプレーをしている。

西山もそれには気づいているだろうに・・・

おかしなやつだ。

さて、肝心の西山と言えば。

ふん、うまいなあ。さすがだよ。

他の連中、早く決めてくれよな、まったく。

などと、心の中で毒づいていた。

というのは、準決勝からはシングルス1からダブルス2まで、同時進行なのだ。

すなわち、5試合が同時に行われ、早く3勝をあげた方が勝利、というわけだ。

西山は、自分の役目は負けないことだと考えていた。

自分は他の連中が3つ勝つまで、粘ればいい。

ようは、時間稼ぎだ。

ここまでは、うまく行っている。

ついに6 - 6まで来た。

まだかよ、あいつら・・・

そう考えながら、チェンジコートの休憩でベンチに腰を下ろした。

「3つとれそうだ。後は気楽に行け。」

後ろから小声で橘がささやいた。

「そうすか。よかったあ。じゃ、負けますよ、俺。」

「ああ、思い切ってやっこい。」

「ほい」

やれやれ、終わりにするか。

ここからは、練習だ。

角田は他の4試合の状況を知っていた。

3つ取れていない。2勝2敗なのだ。

俺が勝たなければ終わりだ。

しかし、あのファーストを入れ続けられたら・・・

この瞬間、角田は崩れていた。

再開後のサーブは角田からだった。

絶対に落とせない。

力が入ってしまった。

「フォルト！」

まずい。

セカンドはコースを狙わなければ。

無理をする必要はまったくなかった。

たとえば、返されてポイントを奪われても、次のポイントを取ればいいだけなのだ。

しかし・・・

「ダブルフォルト！」

西山はもう粘る必要もないので、リターンの練習をする位のつもりだった。

ところが2本ともはずされた。

なんだよ・・・まあ次は入れてくるだろ。

しかし、西山は気づいた。

角田のリズムが狂っている。

トスをする前、必ず3回ボールをバウンドさせるはずだが、やたら何回もバウンドさせている。

ふん。負けてショックを受けているんだな・・・

案の定、ファーストが入らず、セカンドにも力がない。

西山は思い切ってうちこんだ。

なにせ、もう勝っているつもりなので力みもなく振りぬけた。

そしてみごとにリターンエースをとった。

やるじゃん、俺。

けっこういけてる？

これで勝負がついた。

ブレイクに成功した西山は、最後のサービスゲームを簡単にキープした。

いやあ、角田は相当ショックだろうなあ。

俺なんかに負けるとは思わなかっただろうなあ。
能天気ベンチに帰ると、坂本が

「やったな！奇跡だ！」などとわめいている。

「まあな。否定はしない。」

「いやあ、俺と鈴木之急造ペアはだめだわ」

「また負けたのかよ。他の4人に感謝しろよ。」

「はあ、他の4人？お前入れて4人だよ。」

「？、何、俺はおまけの勝ちだろうが。ダブルス1とシングルス2、
3で勝ったんだろ？

勝負ついてからの試合だぞ」

「はあ？お前、なに言ってるんだよ。勝負ついたら、それで他の試合
は打ち切りだぞ。」

なに？そりゃそうだ。もう3つとってたんなら俺の試合は打ち切り
に・・・

！そうか！タッチは俺にうそ言っただんな！

でも、何で？プレッシャーをかけたくなかったからか？

そこへ橋がやって来た。

「よお、西山。ほんとにサーブだけで勝ったなあ。」

「先生、よく言いますよ。俺、ヒーローじゃないですか」

「まったくだ。角田はプレッシャーに負けたみたいだな。」

「そうすね。でもなあ、なんか間抜けだよな俺。」

「間抜けでもなんでも、勝ったにはちがいない。」

よくやってくれた。」

西山はうれしいような恥ずかしいような、微妙な気分ではあったが。

第24回

もちろん、亜由美も見ていた。

最初は、角田のファーストをまったくレシーブしようとしないうちに西山にあきれていた。

なんか、感じ悪いなど思っていた。

しかし、一緒に見ていた平田はこう言った。

「やるなあ、西山君。」にやにやしながら。

「なんで？相手に失礼じゃない？」

「まあ、そう見えるかもね。」

でもね、相手に勝つために、いや、負けないうために全力をつくす、てのはいろんな形があると思うよ。」

「どういうこと？」

「西山君には悪いけど、多分ともにラリーしたら勝ち目ないよ。じゃあ、どうするか、だよな。」

とりあえず、ファーストサーブは通用する。

なら、キープはできる可能性が高い。

キープできるってことは、負けないってことだよな。」

「そ、そうかな。」

「そうだよ。キープしてたらチャンスは来るもんさ。」なるほどね。そういうものか。

そう言われれば、何かそれらしく見えてくる。

正直、西山がシングルス1と聞いた時は、かわいそうに思ったのだ。

多分、こてんぱんにやられるんじゃないか。

ところが、小憎らしいくらいの態度でプレーしている。

スコアは接戦なのだが、全然手に汗握るという感じではない。

西山君で・・・天然？

結局、角田の自滅のような形で勝負がついた。

角田が気の毒に思えてきた亜由美だった。

一方的に、西山に軽い失望を覚えた亜由美だった。

そんなこととも知らず、西山は目だけ動かして

亜由美の姿を探していた。

いたんだけどなあ・・・

けっこう俺、やったと思うんだけどなあ・・・

「こら西山。」

なんだよ、坂本かよ。

「なに」

「お前、またシングルスかな？」

「知るかよ。でもかんべんしてほしいよ。」

もう無理。」

「なんで、角田に勝ったんだぞ。」

「あほ。あれはな、たまたまファーストがよく入って、

たまたまタッチが俺をだまして、たまたま角田がプレッシャーに
負けたからだ。」

「たまたまの3乗か」

「そうだよ。でないと、俺が角田に勝てるわけないだろうが。」

「まあなあ。でもレシーブもけっこういけてたぞ。」

「そうなんだ。なんか、力がうまく抜けてさあ。まああれもたまた
まだな。」

それより、長谷川どうなんよ。」

長谷川の手首はテーピングでぐるぐる巻きになっていた。

「今回は無理だな、長谷川、残念だな」

「いえ、しょうがないです。それよりまた西山でいくんですか？」

「いや、いかん。修実はたぶんシングルス1は捨ててくる。」

今の試合見てたからな。やばいと思ってるはずだ。あのやろう」

あのやろう、とはもちろん修実の顧問、柳沢のことだ。

「西山はな、シングルス2で使う。」

「シングルス2？」

「ああ。多分、柳沢はエースである自分の息子をシングルス2に使うだろう。」

西山とはあてたくないはずだ。だから、あててやるのさ。」

「よくわからないんですが。」

「あのな、エースが負ける、あるいは、大苦戦するってのはな、チームの士気にかかわるんだ。うちに対する苦手意識を植えつけてやるんだ。」

これから、何回もぶつかる相手だからな。今回だけの勝負じゃないんだ。」

「はあ、そういうもんですか」

「お前な、うちのエースなんだぞ。同じだぞ。」

まあ、今回はお前のいない東光に負ける、負けないにしても苦戦するってのは修実にとって屈辱なはずだ。」

「先生、大丈夫ですか？柳沢先生と何かあったんですか？」

別に何かあったわけじゃない。ただ、気に入らない。

修実は確かに強い。それは、生徒が頑張っているからだ。生徒が偉いんだ。

それをあいつは、自分と学校のステータスとしか考えていない。

それが許せん。頭に血が上っている橘には、自分も西山を利用していることにまでは

気が付かなかった。

結果的にはそれが、とんでもない事態を招くことになるとも知らず・

第25回

柳沢はまさか本当に東光が上がってくるとは思っても見なかった。

エースの長谷川がいたにしても

甲北大付属の勝ち間違いないと考えていた。
なのに・・・

それにまさかあの角田が負けるとは・・・

あの西山という選手、なめてかかるとまずい。

たぶん、決勝でもシングルス1で出てくるだろう。
万が一ということもある。

というわけで、橘の思惑通りの展開にはなった。

つまり、シングルス2で柳沢の息子は西山と対戦することになった。
交換したメンバー表を見た柳沢は齒軋りしたが
どうしようもない。

橘のやるう・・・

さて、柳沢Jrは別になんとも思っていなかった。

角田ともやったことはあるが、6-1で軽く勝った。

西山とかいうやつは初めてだがなんて事はないだろう。

それより、親父のやつ俺が負けるとでも思ったんだらうか。
それがむかつく。

こうなったら西山をこてんぱんにしてやる。

内心いきりたつJrだった。

さて、いきりたたれている西山だが、橘に抗議していた。

「先生、ダブルスに戻してくださいよ。」

「なんで。」

「なんでって、いいだろうが。こんな時しかやれないぞ。角田や柳沢とやれるなんていい練習になるぞ。」

「もういいですよ。じゅうぶんです。」

「いいか、西山。シングルスとダブルスが全然別物と思ってるようだが、

それぞれがいい影響を与えるんだ。絶対に無駄にはならんから思い切ってやって来い。」

「はあ。」

まあ、そんなふうに言うしかないわな。先生としては。やるしかないかな。

内心、相変わらずの西山だった。

というより、亜由美の姿が見えない方が不満な西山だった。

これで西山が勝ったりするとあまりにでき過ぎなのだがそうはいかない。

そもそも、柳沢Ｊｒは平田に匹敵する力を持つ。

平田は学校に軟式テニス部しかないとため出していない。

この大会では相手がいないのだ。

かたや西山はサブしかとりえない。

闘争心にも欠ける。本来、力に差があり過ぎるのだ。

角田との試合では、「たまたまの３乗」がそろっただけなのである。

柳沢Ｊｒは角田を一蹴する力がある。

どうなることやら・・・と、一番思っていたのは西山自身だったかも知れない。

さて、その頃、西山に軽い失望を覚えていた亜由美はいええ。

西山を素直にほめる平田を少し見直していた。

すごい選手なのに、全然えらぶらない。

傲慢なところもない。

何考えてるかかわからない西山君より・・・

西山にはあまりよろしくない展開ではあった。

しかし、西山以上によろしくないと思っていたのは佐久間美紀だった。

まずい。亜由美の関心が平田に向きかけている。

とてもまずい。

でも、亜由美は親友でもある。

まずい！

段々、怒りの矛先は西山に向いていった。

まったく、あの天然！何してんのよ！

それぞれがそれぞれの思いをめぐらせながら

決勝戦に集まってきていた。

決勝戦はダブルス2から1試合ずつ行われる。

途中で一方が3勝をあげても、最後まで試合は行われる。

ダブルス2は以外にも、坂本・鈴木急造ペアが善戦した。

これで勢いがついたのは東光だった。

ダブルス1も大接戦となった。

しかし、結果は修実の2連勝ではあった。

シングルス3の武田が負ければ終わりという状況ではあった。

ここで武田が勝てば物語としては盛り上がるのだが、

武田はあっさり負けた。

相手が悪かった。本来、Jrに次ぐ力を持つ

島田だったのだ。

これで修実の連覇は決まった。あとはおまけのようなものだった。

そこまでの展開は大方の予想通りではあった。

Jrも西山もそう思っていた。

ただ、チームの勝利のためというしびりがはずれた事が

二人に微妙な変化を与えた。

柳沢 J r は自分の圧倒的な力を見せつけることしか頭になかった。

西山は天然お気楽に、少し、対戦相手への興味が湧いていた。

自分のサーブは通用するんだろうか？

期待半分、怖さ半分というところだった。

試合は静かに始まった。

コイントスで勝った西山は当然のことながらサーブをとった。

力むことと無縁の西山は、ファーストサーブ4本で

最初のゲームをキープした。

すごいサーブだ・・・

柳沢 J r は驚いていた。

さすがに表情がこわばっていた。

チェンジコートですれ違った時、西山はそれを見逃さなかった。

あんがい、いけるじゃん、俺。

第26回

柳沢Jrは考えていた。

あのサーブはやばい。

あれを入れられ続けるとやばい。

しかし、そうは行くまい。

セカンドなら何とかなるだろう。

ただ、気に入らない。勝つにしてもいまいちかっこ良くない。すでに団体での優勝は決まっている。

あとは俺の勝ち方なんだ。

どうする？

とりあえず俺もサーブにさわらせない。

柳沢のサーブは変幻自在だった。

コーナーぎりぎりにフラット、スライス、スピンと同じフォームから繰り出してくる。

こりゃすごい。

西山は素直に感心していた。

やまかんで振って当たればもうけものって感じだな。

試しに全部フォアに来ると決めて待ってみたが、

さっぱり当たらない。

やまが当たってもまともに返せない。

こんな具合でお互いにキープし続け、4-4まで進んだ。

意外な展開に観客はざわついていた。

特に西山のサーブとそれ以外のプレーの落差には

笑い声さえ混じっていた。

しかし、意外な展開はそれだけではなかった。

西山は気が付いていた。スピンスリーブだけはトスが少し高い。高くはねはするが届かないことはない。まあスピンスリーブだけ返せてもブレイクできるわけではない。しかし、多分、ビックリするだろう。1本でいいから、何とか・・・と、待っている・・・来た！

その瞬間、西山の右手首は解放された。西山の最大の武器は、手首の強さと柔軟性だった。体全体の力のすべてがラケットを通じてボールに伝わった。前進してきた柳沢のラケットが吹っ飛んだ。

柳沢にとって、ラケットをはじき飛ばされるなどありえないことだった。屈辱だった。

平田にだってこんな風にやられた事はない。大勢の前で恥をかかされた。赤黒い怒りが全身を駆けめぐっていた。ゆるさない・・・

一方、西山はと言えば・・・いやあ、当たった当たったぞ。最初で最後だろうけどなあ。などと、単純に喜んでいた。ヤマカンがたまたま当たったと思っていていたらまたチャンスはあるかもな。そう思いながら、次のサーブを待っていた。

柳沢はもちろんまぐれだと思っていた。

西山は背が高い。少しスピードが落ちるスピンサーブだから
たまたま当たっただけだ。

なら、もう一回当てさせてやる・・・それから・・・

わざと、スピードを殺したスピンサーブを放った。

西山はさっきよりもさらに打ちやすい球が来たことにか
えって力が入ってしまった。

スイートスポットをはずしてしまい、レシーブは高く浮いた。

柳沢は見逃さなかった。

ジャピングスマッシュ。

西山は、やられたと思った。

が、次の瞬間、右手首に激痛が走った。

「大丈夫か！」

ネットの向こうから柳沢が駆け寄ってくるのが見えた。

手首をおさえてうずくまっていた西山は

「ああ、たぶん」といいながら

柳沢を見た。

すまないと誤りながら心配そうな表情の中に

笑っている目が見えた。

第27回

わざとやったな・・・

その瞬間、西山は痛みが引いていくように感じた。

こいつには負けられない。

絶対に負けられない。

俺は下手だけどテニスが好きだ。

いくら上手くたって、こんなことするやつには負けられない。

立ち上がった西山は、ベースラインにもどった。

不思議と平静でいられた。

もう柳沢が怖くはなかった。

どんなサーブが来ても返せるような気がしていた。

もうあのサーブは打てないだろう・・・

このゲームをキープしたら俺の勝ちだ。

柳沢はそう考えていた。

かなりのダメージだったはずで、棄権すると思ったがな・・・

来い。返してやる。

柳沢はフラットサーブをはなった。

来た！

体が自然に反応した。

手首をかばうような気は全然起こらなかった。

何も考えず、体の反応するままにスイングした。

しかし・・・

ボールは前に飛ばず、ラケットはコートに転がった。

激痛で頭がしびれた。

こりゃだめだ。

さすがに意地だけでは無理だな。

今日のはかんべんしといてやるか。

いつもの西山なら、ここで棄権を申し出ていただろう。

しかし、何を思ったのかラケットを拾い上げ、

ベースラインに戻ったのだ。

右手がだめなら左手があるじゃん。

左手でやってみよう。

西山は右利きだ。普通ならこれは悪い冗談ではある。

ただ、西山には稀有のフォーム模写能力があった。

小学生の頃から、ボールはどちらの手でも同じように投げられた。打つのも左右同じように打つ事ができた。

遊びで始めた事だが、いつしか無理なくできるようになっていた。

テニスでもできるだろう。

この際、やれる事はなんでもやってやる。

それほど、気持ちが攻撃的になっていた。

柳沢はにわかには気づかなかった。

もう一本決めて、もう次のゲームでブレイクして試合を終わらせることを考えていた。

フラットをバックに決めれば終わりだ。

来た。

予想通りだ。速いサーブがバック側に来た。西山の頭には自分のフォームを鏡に映した時のイメージができていた。

そのイメージを体に命令していた。

柳沢も含め、見ていた者すべてが驚いた。

ラケットを左手に持ちかえた西山が見事なレシーブをしたのだ。

柳沢は一步も動けなかった。

まさか左利きだったのか？

そんな・・・ばかな・・・

じゃあ、右手で打っていたあのサーブは何だったんだ？

左ならもつとすごいのが打てるのか？

これは大変な誤解だったのだが、柳沢の心中に嵐が吹き荒れたのは間違いなかった。

うまくいったぞ。おどろいてやがる。

よし、とにかく行けるとこまで行くぞ。

細かいコントロールは無理だが、何とか打てる。

来い。返してやる。

柳沢はどこにサーブを打ち込んだらいいのか分からなくなっていた。とりあえずボディを狙うしかない・・・

しかし、これは西山でもわかることだった。

ボディに来ることは予想していた。

そしてまた、左手からスライスで返し、思い切ってネットに出た。

これも柳沢の意表をつく結果となりミスを誘った。

柳沢はパニックに陥っていた。

すでに団体での勝敗がついている上、故障した西山の善戦に観衆の応援はほとんど西山に向いていた。

柳沢は自分が狙って当てただけに平静ではいらなかった。続くサーブでは初めてのダブルフォルトを犯した。

ついに両者通じてはじめてのブレイクとなった。

西山の5 - 4となった。

しかし・・・

とりあえず、レシーブは左でもうまく行った。

柳沢もビックリしたろうからな。

ただ、サーブはさすがに右のように打てないだろう。

こんなことなら、練習しとくんだった。

などと、西山は少し弱気にはなっていた。

しかし、このまま負けられないという気持ちだけは

沸々と湧き続けていた。

第28回

ベンチに戻ると、橘が声をかけた。

「お前・・・、面白いやつだな」

あきれたような表情でそう言った。

「でしょ？でもね、もうネタ切れですよ。」

さすがにサーブは打てないですよ。」

「そうか？まあいいじゃないか。全部ダブルフォルトでも十分柳沢を追い詰めてるぞ。遊んでやれ」

「そうすね。アンダーハンド打ってやろうかな」

「アンダーハンド？だめだだめだ。」

「そうすね。最後は華々しく散りますか！」

とは言ったものの、さてどうしたものか。

ベースラインに立った西山は、とりあえず

頭の中でイメージしてみた。

鏡の前で何度も素振りをした・・・

あの鏡に映った自分の通り真似すればいいんだ・・・

反対に映った自分を・・・

鏡の向こうの自分は左で打っていた・・・

段々自分の体に脳に描いたイメージが伝わっていくのが感じられた。

そして、何の違和感がなくなった瞬間。

トスがあがり、体がしなり、左腕がムチのようになった。最後に左手首が開放された。

柳沢は一步も動けなかった。

右で打ったサーブと全然変わらない。

その事実完全に打ち砕かれていた。

その後、続けて3本のサーブエースであっけなく試合は終わった。

「西山、6 - 4！」

審判のコールと同時にコート周囲からどよめきが起こっていた。

両打ちの西山。

この日から、他校の選手からそう呼ばれるようになったのだ。

準優勝した東光学院は、冬休みに行われる県大会でのシード権を得た。その大会で3位までに入れば地方大会に進むことができる。これは、東光学院にとって初の快挙になる。

橘は心中、快哉をさげんでいた。

そして、このメンバーなら高校でも期待できる。

一度、喝を入れておくか。

より高いレベルを目指すためには気を引き締める必要がある。

しかし・・・

翌日、東光学院中学テニス部の面々は普段の生活にもどっていた。当然のことながら、全員が天狗になっていた。

中学生である。当たり前だ。ご褒美みたいなもんだ。

「俺たちって、いけてるよなあ」

「おお、見てた女子もみんな俺たちを応援してたよな」

そんなわけではないのだが、思い込みとは可愛いものではある。

試合に出たレギュラー連中は、始業前に廊下で嬉しそうにしていた。そこへ、西山がやって来た。

「お前ら、何で朝練こないの？」

「へ？西山、今日も朝練したのかあ？」

「ああ、タッチーが放課後コートに集まわって言うってたぞ。」

「なんで」

「さあな。別に怒ってる感じじゃなかったけどな」

「今日くらい、朝練さぼったって、バチあたらないよなあ」

とか何とか言いながら、それぞれのクラスに戻っていったのだが・

・

なんかあるぞ。西山は思っていた。

タッチーは何考えてるのか分からないところがあるが、今日に限ってはつきりわかった。

気を引き締めさせるためだ。

うまく伝わるというけどな・・・

そして放課後。

うまく伝わらなかった。

第29回

朝練に来たのが西山一人。

橘には、実は好都合ではあった。

ガツンと喝を入れるちょうどいい口実になった。

ここで、一度締めた方がいいと考えていた。

と、そこへ西山が入ってきた。続いて鈴木。

その後、5分ほど経ってから残りの部員が入ってきた。

「昨日は、ほんとによくやった。」

まずは、ほめないと。

「長谷川、ケガは残念だったがエースとしてよくがんばった。

他の皆も、持ってる力を全部出そうっていう気合がよく

伝わってきたよ。」

西山以外は、ニコニコしている。鼻がふくらんでいる。ここだ。

「しかし。」

橘は腹に力を入れた。

「まさか、満足してるわけじゃあないだろうな？」

来たよ、説教か？という表情に変わる。

「俺は、もっと上を目指してる。こんなもんで満足してないぞ。

いいか、これで他からのマークは厳しくなる。今のまんまじゃ

つぶされるぞ。」

教室から笑顔が消えた。

「なぜ、今日、朝練に来ない？そんな緩んだ気持ちでどうする？

なぜ、もっと上を目指そうという気にならない？」

そこで長谷川が口を開いた。

「昨日の今日ですよ？いいじゃないすか。」

「今日も、修学は練習してるぞ？お前らに勝った学校が練習してるんだぞ。」

そんなのほんとした気分です。ただ、楽しくやれたらいい、てやつは

やめろ。もっともっと練習して、上を目指そうって気になれないやつは、やめろ。」

全員の表情がこわばった。

「いいか、練習量の多寡じゃない。短い時間でどれだけ集中してやれるかなんだ。」

いい加減な気持ちでは勝てないぞ。」

よし、どうだ。引き締まっただろう。橘は思った。しかし・・・

「やめます。」

長谷川が言った。

「な、なに？」

「俺は、そこまでしてやる気ないです。学院に入ったのはテニスするためじゃないですから。」

俺は、楽しくやれたらいいですから。」

エースの発言は重い。

「長谷川いないんじゃないよ、団体戦勝てないよな・・・」

それに、先生の言い方、なんか納得できないです。」

今度は内山が言った。

予想外の展開に、橘は言葉が出なかった。

長谷川が立ち上がり、続いて内山が立ち上がり、教室から出ていった。

続いて・・・坂本、佐々木まで。

残ったのは、西山と鈴木だけだった。

な、なぜだ？そんな程度なのか？

確かに、うちの学校は進学に有利だからと入学してくる。

しかし、部活動はそんな程度なのか？

残ったのは、奇跡のような勝ち方をした西山と、

ダブルスでしか使えない鈴木だけ。

しまった、と思ったが後の祭りだった。

第30話

エースの長谷川がやめた。

長谷川がいなければ団体戦で勝負にならない。
だから続けても意味がない。

負けると分かつてる試合なんて・・・

それに、所詮進学校の部活動だ。

楽しくやればいいんじゃないの？

しゃかりきになっても先は見えてるし・・・

そう思うのが普通かも知れない。

西山もそう思わないではなかった。

しかし、やめるといふ気にはまったくならなかった。

人は人。自分は自分。

俺はテニスが好きだから続ける。

仲良く遊ぶだけのためのものじゃない、もはや。

そんなわけで、東光学院のテニス部は一気に弱体化した。

高校になると、一気に大会への参加校が増える。

中学では軟式が中心だが、高校では硬式も盛んだからだ。

その上、中学では学校に硬式がないため、学校外のテニススクールなどで

腕を磨いていた連中が高校の部活動に参入してくる。

連戦連敗は当然のことではあった。

しかし、東光学院高等部テニス部は意気盛んだった。

普通、高校2年の秋で引退する。

しかし、西山と鈴木にはそんな気はなかった。

今の後輩が夏休みを越えて伸びてくれば、秋の新人大会の団体戦では勝負できると信じていた。

何とか、準決勝に進んで県大会から地区大会に進むのも夢ではないと

本気で思っていた。

顧問の橘もそう考えていた。

西山と鈴木はダブルスは勝てる。あとふたつ。
シングルスでふたつ。

テニスは他の球技のような団体スポーツではない。

すごい投手がいる、すごいエースストライカーがいる、というわけにはいかない。

個人の勝利が必要なのだ。

だから、よりチームの足を引っ張るプレッシャーがきつい。

今、勝利が絶対に必要とされる立場になった西山は
それをひしひしと感じていた。

しかし、それを楽しめる自分も感じていた。

ただか高校の部活動、しかし、だからこそ中途半端じゃなくて
やるだけやらないと本当に楽しんだことにはならない。

幸い、鈴木もチームの中心になったことでキレル悪癖がなくなり、
冷静にプレーをするようになっていた。

1年の連中も早くから公式戦に出場できる喜びで元気だった。
負けても負けてもそれが力となって行くのが実感できていた。
やれるぞ。西山は冷静に燃えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6025c/>

エースをねらえ？

2010年10月22日14時10分発行